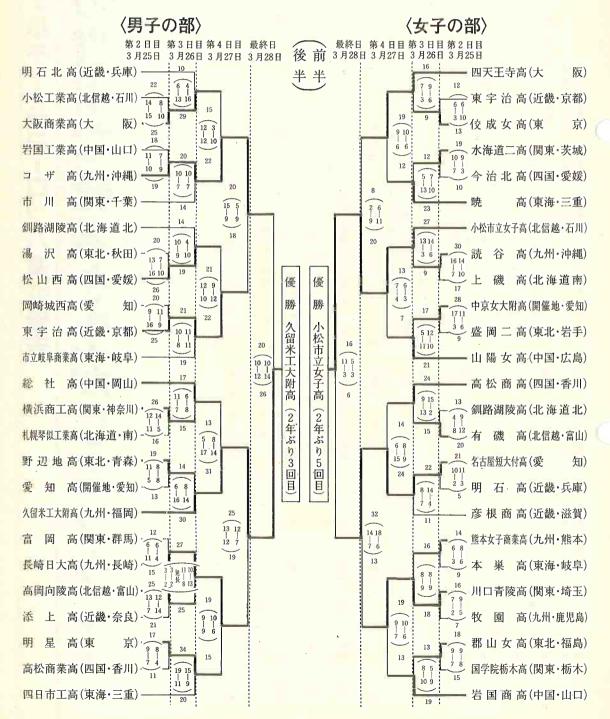
第9回全国高校選抜大会
男子・久留米工大附、女子・小松市女が優勝

第９回全国高校選抜大会は、３月25日から28日まで愛知県体育館で、男女各25校が参加して熱戦をくりひろげた。男子は久留米工大附高（福岡）が２年ぶり３回目、女子は小松市女高（石川）が２年ぶり５回目の優勝を飾った。(詳細は５月号にてお知らせします)

○男子ナショナルチームヨーロッパ遠征報告

遠征での貴重な経験を生かしてソウルへ

団長・安藤純光

眼下に美しく化粧したアルプスの連山を雲間に眺めて飛んで間もなく、BA510便は予定の時間に最初の目的地であるイタリア・ミラノ空港に着いた。空港には、イタリア協会のパビヤバック氏が出迎えに来ていたが、バスの到着がおくれ、待つこと30分、バスでホテルに向う。ホテルは、空港から50㎞約1時間、市街地をはずれた全くの郊外、ホテルの周囲には住宅はあるもの道路を隔てた向い側は広々とした畑が広がるというような環境にあった。建物もいわゆるホテルというものではなく、3階建てのロッジといった方が適切なものであった。何の変てつもないところに、なぜこのようなロッジがあるのか不思議に思われたが、夜になると1階にあるレストランに地元の人と思われる人々が三三五五集まって来てワインやビールを前に一時を過している姿を見た。ゲームの行なわれる会場への行き帰りに、適当な間隔で同類のロッジが見られた。われわれは、このホテル・カステロにチュニジアチームと同宿であった。他のチームは、他の同様なホテルに滞在しているとのことであった。ときおり雪の舞うどんよりした空模様の寒い日が多いが、雲が切れるとスイスとの国境の山並みが雪景色を見せる。

3月5日、いよいよ遠征第1戦をイタリア・ナショナルチームとトレーニングマッチとして戦うことになった。われわれが出発前に入手した遠征スケジュールでは、イタリア大会には、Aグループ=スイス、アルジェリア、キューバ、日本、Bグループ=アメリカ、ブルガリア、チュニジア、イタリアの8カ国で、グループ内でのリーグのあと、同順位チームが対戦して全体の順位決定を行なうことになっていた。

日本はリーグでイタリアとの対戦がないので、大会前にトレーニングマッチを申し入れて了解されていた。しかし、参加チームに変動があり、イタリアと都合2回対戦することになったが、トレーニングマッチは予定通り行なわれた。ゲームは、部分的にはすぐれた技術をもつ日本チームではあるが、ミスが多く、とくに後半にミスからの自滅の形で初戦をかざることはできなかった。翌6日にはこれも予定されていた会場のあるMOLTENOのクラブチームとのトレーニングマッチを行った。この大会の会場となる体育館は、完成したばかりで、日本流にいえば「体育館落成記念」としての国際大会であった。体育館の建設には、この町の教会の牧師さんが資金を集めて、今日の完成を見たとのことであった。1500ほどの観客を収容するスタンドとハンドボールの競技場が一面とれるフロアーという規模のものである。ゲームは、さすがに日本チームが勝つことができたが、初戦と同様にミスが目立ち、明日からの本大会に不安を感じた。

この日午前中に参加チーム代表を集めてミーティングがもたれ、参加チームは日本、アメリカ、アルジェリア、チュニジア、イタリアの5カ国でプログラムを変更して5チームのリーグで行なうことが伝達され、日本は8日にチュニジア、9日に対アルジェリア、10日に対アメリカ、11日最終日に対イタリア戦を行なうことになった。このゲームは、TV(録画)で後日放映されるとのことであった。

いよいよ本大会を迎え、第1戦でチュニジアと対戦することになった。ゲームは接戦であったが、肝腎なところで心配されたパス・キャッチミスが出たり、ノーマークのシュートをはずして、期待された第1戦を失なってしまった。

第2戦のアルジェリア戦では、まだまだミスはあったものの第1戦より動きもよく、6点の差をつけて貴重な1勝をものにすることができ、勝つことの喜こびと重みを味わった。

そして第3戦の対アメリカ戦に望みをつないだ。対アメリカ戦では前半を終って5点のリード、前日にひきつづき調子が上昇して勝利はわが手にと思われたが、後半に入ってミスから連続得点され中盤で追いつかれ、結局は逆転され敗れる結果に終った。信じられない結果であった。日程の変更で最終戦でイタリアと対戦することになったが、前日の逆転負けのショックは大きく、ミスも重なり時間の経過とともに水をあけられ敗れた。結局1勝3敗、4位の成績で北イタリア国際大会を終った。

反省すべき多くの問題をかかえての次の目的地であるスペインへの移動は重いものであったが、全員で「次にはもっといいゲームをしよう」と誓い合ってマドリッドへ向った。

ミラノ空港を発って2時間あまりの飛行の後マドリッド空港に着いた。スペインでの行動が明示されておらず、不安な到着であったが、スペイン協会の出迎えを受けて解消した。バスが用意されていて、先に到着していたキューバ(イタリア大会にも参加を予定されていたが、不参加であった)と同乗してGIJONに向った。バ

スはマドリッドの市街を抜けて、人家も見当らない宏大な畑地の中を走り抜け、いくつかの小さな町を通り過ぎて走り、やがて丘陵地帯から雪深い峠を越えて走りつづけた。マドリッドから400kmとのことで、空港を4時すぎにスタートしたバスは途中1回休憩して11時30分に宿舎であるホテル・アストリアに着いた。7時間のバス旅行で選手はかなり疲労しているようであった。

GIJONは、ビスケー湾に面した町でホテル・アストリアは道路を隔てて向い側は波が打ち寄せる砂浜が広がり美しい町であった。

スペイン大会でもまたわれわれが手にしている参加国とは異なったものであった。ユーゴ、ルーマニアの姿はなく、参加チームはAグループ＝日本、アメリカ、スペイン、Bグループ＝アルジェリア、キューバ、スペインジュニアの5カ国6チームであった。したがって日本は、この遠征の中でアメリカと2回戦うことになる。

ジジョン国際の開会式

第1戦はスペインとの対戦であったが、連戦と移動による疲労のせいか、イタリアでの反省すべき問題点も解決されず14対29と大敗を喫してしまった。第2戦の対アメリカ戦は、4日前にイタリアで逆転負けの苦汁を嘗めさせられているので、なんとか雪辱しなければという気運もあって、未解決の問題点はあったとしても今遠征中の最もよいゲームであったと思う。残念ながら雪辱はならず引き分けに終った。対スペイン戦の大きなマイナス点が災いしてグループ3位という結果になり、最終日Bグループ3位のスペインジュニアと対戦することになった。相手がジュニアであることで負けられないというプレッシャーもあったろうが、しかし、ゲームは終始日本がリードして余裕を感じさせるものであり、ナショナルチームとしての面目を保ったゲームであった。

翌朝9時20分マドリッド発でロンドン、モスクワ経由で帰国の途につくために夕刻GIJONを出発、バスはキューバと日本チームを乗せてマドリッドに向った。キューバはこれからルーマニアで5試合して、スイスの世界選手権大会に臨むとのことであった。

3月4日成田を出発して2週間で9試合の遠征は、過密なスケジュールであった。加えてプレイヤー14名ということもあって、選手諸君の疲労は日を追って増大していたと思う。全員の協力で揃って遠征を終えることができたことはなによりであった。ナショナルチームとしては、ソウルに向けて早急に解決しなければならない課題が山積みされていると思われる。この遠征で得た貴重な経験を十分に生かして、期待に応え得る逞しい成長を祈りたい。

戦術的な、技術的な成果・評価および課題については、津川監督と佐藤コーチの報告にゆだね、ナショナルチームヨーロッパ遠征の団長という初体験を通して感じたことをまじえて遠征の経過の概略を述べた。

遠征での成績

◎イタリアカップ

チュニジア24（9－9、15－3）22日本

［得点］首藤8、山本5、西山、奥田各5、宮下2、藤井1。

〈戦評〉ゲームの立ち上がり3つのミス（チャージ、ダブル、オーバーステップ）があり、逆にチュニジアのカットインプレーを許し、3－0の悪い立ち上がりとなった。それ以後は、1点あるいは2点間

隔でのシーソーゲームとなったが、日本は最後までディフェンスにおいてペースをつかむことが出来ずたえずチュニジアのペースでの試合となり、当然勝つべき試合を落としてしまった。

日　本26〔13―8／13―12〕20アルジェリア

〔得点〕西山、朝生、立木、首藤各5、志賀、山本各3。

〈戦評〉アルジェリアは、ロサンゼルス・オンピック以来大きくメンバーを若返らせ、以前ほどのディフェンス力はなくなっていたが、アルジェリア独得のディフェンス方法は変っていない。ゲームは、後半に入り日本のディフェンスが良くまとまり、特に後半7分から17分までの10分間無得点に押さえたのが大きく、ゲームの主導権をつかむことが出来た。

アメリカ22〔9―14／13―7〕21日　本

〔得点〕立木、山本各6、西山4、首藤3、奥田2。

〈戦評〉前半日本はポストをよく生かすことが出来て確実にポイントをあげ、またディフェンスにおいても早い詰めとフォローで素晴らしいゲームであった。後半に入り、開き直ったアメリカの体力を生かしたフェイントに対し点差がある安堵感からかチェックが甘くなり、カットインを許した。また、オフェンスにおいてもポストをマークされ引いて守られだすとリズムを狂わし、DF、OFの両方が狂い出し、立て直すことが出来ないままずるずると点差を縮められ、よけいにあせりからノーマークをはずすなどミスを連発させ、大きな星を落としてしまった。

イタリア26〔13―8／13―11〕19日　本

〔得点〕山本、首藤各4、西山、奥田各3、宮下2、藤井、志賀、朝生各1。

〈戦評〉日本は、このゲームも立ち上がりが悪く、4―0と引き離されてしまった。特にこのチームの弱点としてDF、OFの両方が一度に悪くなることがある。せめて片方が良ければ、得点の上ではひっつくことができるのだが、これはペースのとり方が悪いのであろう。得点の差以上に完敗であった。

◎スペインカップ

スペイン29〔14―6／15―8〕14日　本

〔得点〕首藤6、西山3、立木2、朝生、内藤、宮下各1。

〈戦評〉スペインの高い、そして重いディフェンスに対して日本は一番若い首藤が積極的にプレーしただけで、ほとんど攻撃にならなかった。ボール回しが絶えずプレッシャーをかけられている状態でリズムがとれず、良い位置どりが出来ていない。スペインは大変バランスのとれたチームで、堅いディフェンスからの速攻が大きな武器となっている。後半、GK大畑のたび重なるファインプレーがせめてもの救いであった。

地元の子供たちにサインする井藤選手

日　本16〔6―7／10―9〕16アメリカ

〔得点〕奥田5、首藤4、西山3、藤井、立木各2。

〈戦評〉イタリアでの対戦の反省を生かして、今日のゲームぜひ勝とうという意気込みで試合に臨んだ。前半から素晴らしいプレーが多く、またコンビネーションも良く決まっていたが、後半に入って攻撃の確率が悪くなりだし、特に勝負どころでノーマークシュートを6本もGKにとられ、結局は勝ち試合を引き分けに逃げられた。

日　本29〔16―13／13―12〕25スペインジュニア

〔得点〕西山10、首藤6、朝生、立木各4、藤井3、志賀2。

〈戦評〉日本は終始バランスのとれた攻撃を展開し、ロング、ポスト、サイドとそれぞれが得点し、久しぶりに余裕のあるゲームでジュニアチームに快勝した。

〈総評〉

このチームが結成されて1年4ケ月、途中あの大同の事件でメンバーを大きく入れ替えてから8カ月、それを考えると大きく成長の後がうかがえる。ただ、今の状態は、成長はしているものの、力量的には今までの全日本チームの中でも一番弱いのではないだろうか。しかし、前記したとおり、成長の度合は大きく、特にこのような強化遠征の度に成長し、チームがまとまってくるのが手にとるようにわかる。

①この遠征においては、コンビプレーをきっかけとした連続プレーが少しづつ出来るようになり、チームとしてのバランスがとれつつある。ただ、コンビプレーにおけるそれぞれの役目を理論的に理解し、それをいろいろな場面で応用出来るようにする必要がある。

②コントロールタワー的人材の育成を再考する必要がある。ペースをつかむ。相手のDF状態に対して適確な攻撃方法を指示するなどの選手の育成。

③ディフェンス力

(ア)個人的、(イ)チームとして、ディフェンス力を今後も強化していかなければならない。

選手たちの感想文

井藤英忠

・ゲーム

1点を争うゲームに対し、弱かったと思う。1点を争っている時こそ、自分たちのプレーができなければ、いつまでたっても勝てない。イタリアカップでのチュニジア戦、アメリカ戦などは、ほんとに今一歩の所で負けてしまった。1点リード、2点リード、またその逆の場合など、これまでのトレーニングやゲーム、ミーティングなどで理解できているはずだったが、もう一度小さな所までミーティングする必要がある。体力、技術、精神力とこの3つが揃っていれば良いが、技術、体力をトレーニングで養っても精神力で負けては全部が無駄になってしまう。スペインカップでの対スペイン戦などは、全く自分たちのプレーができなかった。確かにスペインは強いチームであるが、1回2回の失敗でプレーが委縮してしまい、自分たちのプレーができなかった。もっと表面に「やる気」を出していこうと思う。

スペインカップでのアメリカ、スペインJrとのゲームでは「勝つ」という気持ちが、これまで以上に全面に出て、良い内容であったと思う。アメリカ戦は、勝てずに引き分けで終ったが、長い守りに耐え、確実に点を入れる事ができた。今回の遠征で、最初にイタリアナショナルとゲームした時には、2～5分間も守っているのに、マイボールの瞬間にあわてた攻撃を繰り返し失敗して、また相手に長くボールをキープされ、バテた所をカットイン、ポストと点を取られたが、アメリカ戦ではその反省が生かされていたと思う。アメリカ戦の後ということで、スペインJrにも良く動きができ、自分たちのプレーが、ずいぶん有効に使えたと思う。この2ゲームでは良いプレーが各人、チームとも出来たが、何よりも精神的に強かった事が第一である。強い気持ちがあれば、良いゲームがもっともっとできる。2月4日～2月18日までで9ゲームあり毎日がゲームとなって、体力の維持、気持ちの切り換えが難しかった。

今回の遠征の良かった所、新しく良い面はさらに延ばし、悪い所は反省、早く修正し、強いチームになっていきたいと思う。

大畑孝広

今回は約2週間という日程の中で、9試合を消化したという事で、大変忙しい遠征であった事を思い出す。個々にいろいろな思いを残して帰国したと思いますが、私が一番頭に残っているのは、ペースの配分に弱点があり、自分で首を締めているような感じがある。この事は、点数にいうと、接戦はするが勝てないという事に現われていると思う。具体的にいえば、日本チームは、ノーマークを2本外せば、勝利はないといっても過言ではないくらい、DFに弱い所がある。1回の攻撃で1点を取り、大事に大事に守り、少差で勝つというのが対外国との必勝法だと思う。今回は3本に1本はシュートを外したりして、OFだけのリズムを萌すだけでなく、DFまで響いてしまい、点の取り合いになって、最後に競り負けてしまった事が多い。それが全てだとは言わないが、重要なポイントである事は確かである。

それにもう一つ悪い事を書けば、練習でやっている事が中途半端で、型だけは出来ているように見えるが、一つ一つに理論がなく、ただ動いているだけにしか観られなかった。これは、常日頃からコーチに言われている事だが、練習している以上の事は、決して試合で出せるものではないので、練習では納得のいく所まで追求して、完全に自分のものにしていく必要があると思う。

悪い事ばかり書いたが、減点法ばかりで、物事を観ていたら、沈むばかりである為、良い所は進んでのばしていったら良いと思う。それは、コースポジションである右フローターを若い首藤がやっているが、まだまだ緻密さはないが、野性的に点を取れるようになり、これから大変楽しみになってきた。

また試合数も増してきて、段々と若い選手たちに自信らしきものが出て来ている事も、今回の遠征にとって大きな収穫であった事は確かである。

ハンドボール以外では、楽しい事が少なかった遠征であるが、全日本として、一つ一つ成長していく中の試練であり、じっと耐えて、陽の目を見る所まで頑張って最強のチームといわれるチームになりたい。

最後に今遠征に際していろいろと御協力して下さいました方々に御礼を申し上げ終りたいと思います。どうもありがとうございました。

矢内　浩

今回の遠征は、現在の全日本にとって、今年9月にあるアジア大会で勝つ為に個々の選手、チームのレベルアップを図る遠征だったと思います。昨年の世界選手権で(予選)中国には引き分け、韓国には大差で負け、アジアでも日本は勝つことが出来なくなってしまった現在、全日本として早くアジアでの王座を奪回しなくてはならないので、今回のような遠征で、レベルの高い世界を相手に自分達の力をためし、かつ、レベルの向上を図るには絶好の場であると思います。

今回は、遠征メンバー14名(選手いつもは16名)少ない人数で14日間を戦うことになり、選手としては体力的にきつい遠征だったと思います。

2月3日にイタリアミラノに着き、その後2時間かけホテルへ到着。次の日、まだ時差ボケも取れないまま、イタリアナショナルチームと練習試合を行なった。前半は互角の勝負だったが、後半結局力で押し切られた。敗因はなにか考えてみると、ディフェンスラインが低くなって、間を割られシュートを打たれ、得点を入れられたこと。自分たちのシュートミスなどで自分たちの首をしめる感じのゲームであった。

イタリアカップでは、アルジェリアには勝ち、アメリカ、チュニジア、イタリアに負け、1勝3敗で、やはりいつも言われている集中力、気迫が(闘争心)がなく、ディフェンス、オフェンスとも自分たちの力を十分に出すことが出来ずにイタリアカップが終ってしまった。

アメリカ戦などは勝てる相手で、自分たちで相手に勝ちをプレゼントしているようなもので、前半5点も開きながら、後半は前にも言

ったことですが、自分たちでシュートミスで相手に連続得点され勝てるゲームを落としてしまった。

いつも遠征の感想文を書くと、自分たちの気迫がない、集中力がない、闘争心がないなどの同じ内容の反省を書くので、自分たちは、いつまでたっても進歩がないと思います。これでは、いくら遠征してゲームをしても、自分たち（チームの）レベルの向上はないので、個々の選手が、頭の切り替えをする必要があると思います。自分たちの考え方を替えないと、いまの全日本は、アジアでも勝つことが難しいと思うし、自分たちの目標はあくまでソウル・オリンピックに出場すること、したがって、アジアでは、中国に予選で戦い勝たなくてはならないので、まだ、1年もあるなどと考えていると、取りかえしのつかないことになってしまうような気がします。

最後に、今回の遠征での自分の反省をすると、あまりゲームに出場するチャンスがなく、ベンチで見ている方が多かったので、ヨーロッパのGKをじっくり見ることが出来た。外国のGKは、位置どりが早く、シュートコースに入るのも早い。それにボールをこわがらないので、自分の体をカベにしてシュートをとっていた。しかし、GKは日本の方がレベルが上ではないかと思います。しかし、外国勢のシューターは、高い打点からシュートを打つので、日本のGKはその高さについていけないところもあったと思います。したがって、高い打点からのシュートには、DFがシューターのバランスを崩して、下のシュートを打たせないようにするか、振りきらせないようにすることで、DFとGKとの関連がとれると思います。

今後は、井藤さん、大畑さんよりもゲームに出ることが出来るように練習をすることしかないと思うので、自分に厳しくやって行こうと思っています。

西山　清

昨年韓国で行なわれた世界選手権のアジア予選で、我全日本チームに多くの課題が掲げられた。その後の全日本強化合宿では、これら多くの課題解決の為に行なわれ、そして、その中間発表という意味合いも含めると同時に緊迫した試合経験の少ない全日本チームの試合慣れという意味合いも含めての遠征であった。

今回の遠征では、昨年韓国でのアジア予選に比べチーム自体もまとまりができてきたのだが、最大の課題ともいうべき、立て直し（試合の流れ・ムードなど）の悪さが、目立った。これは、私自身への課題であり、今後全日本チーム中の私の役割と思っている。

とにかく、強いチームになればなるほど、1人1人がそれぞれの役割りを忠実に行なっている。また、指示系統からの伝達の速さとその指示へのチームのまとまりは、全日本チームの最大の課題である「立て直しの悪さ」を解決する為に、絶対必要な要因だと思う。

このイタリア、スペイン遠征を通じて、強いチームに共通していたことは、前文で述べたことはもちろんだが、とにかく「声」を出していることだ。試合観戦中においても、「声」によるファインプレーを、いたる所で見ることが出来た。こうした「声」によるコンビネーションは、チームスポーツであるハンドボールにとって、最優先されるものであることを、この遠征で再確認することが出来た。

藤井　泉

今回の遠征を振り返ると、主な出来事が3つ取り上げられる。

第1に、新生全日本チームとなって、公式国際試合で2勝したことである。これは今まで対中国、対韓国と試合をしてきたが、今1歩のところで敗れてしまい、勝ち味をしらなかった我々にとって大きな意味をもたらしたからである。

第2に、スペインの本場ヨーロッパ勢のハンドボールスタイル、南米キューバおよびアフリカのアルジェリアのハンドボールスタイルを見て、各チームそれぞれ独得の形をもっているということである。スペインチームのパワフルな動きとボールキープ力、DFの足さばき、キューバの高さに加えたジャンプ力、アルジェリアの独得の（マンツー気味）粘りのあるDFとその動き量、しつこいOF力など、目を見はるものがたくさんあり、とても勉強になった遠征となった。そして、全日本チームが今から勝っていくためにみならうべき点も多く、良いものはすべて吸収していく姿勢が必要であることも認識させられたこと。

第3に、全日本チームは勝つために早く相手チームがどんな攻撃の仕方をし、守るのか、DFシフトはどうか、誰がキーマンとして試合をつくるのか、試合の流れはどうなっているのかを見極める力を養成することが必要不可欠であり、これは、コート内の選手だけでなくベンチを含んだ全員がそういった目で見ることが大切であること。

以上3つの事が大きく印象に残ったことである。

また、個人的にはもう一つ忘れられないことがある。それは自分のスーツケースが途中行方不明となり、この遠征で何一つ役に立たなかったことである。そのため、団長をはじめチーム全員に迷惑をかけたことである。

しかし、今回の遠征ほど中味の濃いものはなく、各個人ともハンドボール人生においてプラスになったことはいうまでもないことである。

志賀良弘

今回の遠征に行くにあたって大きな不安と期待があった。それは、自分たちがどこまで本場ヨーロッパのチームに通用するかということであった。なぜなら、このチームになってから日が浅く、ヨーロッパに行くのが初めてであったからである。

しかし、これらの不安もイタリアに着いた翌日のイタリアチームとの練習試合でふっとんだ。そして、どうにかなるぞと思った。短期間であるし、リズムに乗って行けば十分やっていけるのではないかと思った。こうして不安がなくなり、期待が大きくなってきた遠征の初め頃であったが、試合が続き負けだしてくると、不安が大きくなる最悪の状態になってしまった。このような状態を早く脱して、自分たちの良いペースをつかまなければいけないのである。その時に、今まで練習してきたことを、確実にこなせるようにならなければ本物にならないと思った。また、このような状態になると、ついつい人間の弱味が出てくるものであるが、この時こそ、自分自身に強くなり、自分が今、何をしなければいけないのか、自分の役割は何

んであるかを、よく考えて試合などに臨まなければならないと思った。それをチーム全員ができた時に、大きな力となって出てくるのだと思う。

今回の遠征では、短期間でも試合数が多かった事は、いろいろな経験を積むには、とても有意義であったと思う。試合の中での一つのミスも大きく影響をおよぼすということ一つのミスもゆるされないということをわかったことも一つの良い経験であったと思う。

今回の遠征で、他のチームを見てハンドボールの流れも変わってきたなと感じた。ディフェンスにおいては、今までの主流であった6―0ディフェンスからユーゴのような3―2―1、5―1といったディフェンスが主流になっているようであった。オフェンスも上が3人になり、センタープレーヤーがゲームを作っていくというようなオフェンスが多くなってきていた。ポストなどは、どこも体重のあるプレーヤーが多かった。

日本は、もっとプレーの過程を大切にしていかなければいけないと思った。結果にばかりはやりすぎて、結果が少しずれるとチーム全体が、おかしくなってしまうというもろさがでてきてしまうのである。

今回の遠征の良い経験をもっと実のあるものにするかしないかは、これからの自分たちにかかっていると思う。これをかならず実らせることができるようにこれから、アジア大会、ソウル予選に向けて頑張ろうと思う。

奥田新治

イタリアカップに参加している国は対戦して、日本と同じレベルだったと思います。

試合結果としては、1勝3敗という結果でありましたが、アメリカ、チュニジア戦などは勝てた試合だと思います。

とくにアメリカ戦では、ノーマークシュートミスやオフェンスにおけるタイミングのずれなどでムード的に盛り上がりに欠け、結局自分たちで自滅して行った形となったが、体力的におとっている為、ディフェンスで疲れてしまい、後半の集中力の欠如や動きの悪さにつながった。

体力的なパワーアップとゴールキーパーをふくむ7人でディフェンスを心がけ、常にボールに対するディフェンスを孤立させないように声を出し、ホローディフェンスをするようにする。また、パスを自由につなげないようにプレッシャーをかける事。

スペインカップにおいては、1勝1敗1分という結果でしたが、スペイン戦における惨敗、とくに自分たちのプレーを行なえなかったし、試合途中で試合に対する闘争心の欠如という最悪の試合であったと思います。

スペインチームは、全体にディフェンスがボール中心に動き、ボールを持っているプレーヤーに2、3人のディフェンスがマークしているなど常に動かし、素早いチェックを行なっているのが印象に残っています。

対アジア、とくに韓国に対しては、パス回しが早く、フェイントが切れるので、スペインチームのように2、3人のディフェンスがボールを持っているプレーヤーをマークして素早いチェックを行ない、パスを自由にさせないように心掛けるなど、今回の遠征で学んだ事を今後の試合に生かしていきたいと思います。

立木浩二

全日本が世界のレベルのどの位置にランク付けされるか、また、全日本の力および自分自身のプレーがどれだけ通用するか、興味あるヨーロッパ遠征であった。

覚悟はしていたものの、改めて思い知らされたのは、体格、パワーの差である。2m近いプレーヤーが全力で突っ込んで来るのだから、受けているようでは負けてしまうのである。走り出す前、プレーに入る前に止めてしまわなければ……自分一人で止めてやろうと思っても無理であった。ゆえに隣りのプレーヤーがフォローDFにまわる事を基本とするのである。これが今回のDF最大の目標となった。フォローDFとしての横動き、マークしている選手へのピストンDFなど足の止まっている状態は、決してあってはならない。それと相手との間合い、方向づけ、タイミングが、非常に大切だと思った。体の正面で受けてボールに当たる。これは当然の事であるのだが、パワーがある為、体を止めていても腕だけで悪くすれば手首だけでシュートを放たれてしまう。利き腕を完全に阻止する習慣を身につけていきたい。

また、日本のハンドボールはシュートにしても、DFをとってみても、非常に上品、綺麗であり過ぎるのではないか、逆に言えば、スタッフ陣にもよくアドバイスを受ける事だが、闘争心、欲がない、気迫の欠除があげられると思う。ロングシュートでも接触されると打たない（打てない）。下の動きにしても強引さに欠けてるような気がした。他国はもみ苦茶にされてもユニフォームを引っぱられても点を取る闘志が見られた。DFにしても、我々がポストの位置を確保するまでには、押され、はさまれ、相当苦労するのに対し、我々はあまりにも無頓着に相手に好位置を提供している。

もう一つ痛感したのは、1点の重要さである。スペインでの2戦目、アメリカと引き分けてしまった。あと1点取っていれば、1点守りきっていれば、結局、得失点差で負けの型となってしまった。このように競り合ったゲームの運び方、かけ引きを、もっと勉強する必要がある。他のチームが、我々より勝っていたプレーが随分あったが、それらを全日本流に活用して、頑張りたいと思います。

内藤裕治

1月30日からの本田技研での直前合宿を終えて、2月3日成田からイタリア、スペインへ出発しました。

最初は、イタリアへ行きました。イタリアでは、イタリアナショナルとトレーニングマッチを1試合行ないました。試合は、イタリアのプレスディフェンスに攻めあぐみ、ミスから相手チームに速攻を決められて負けてしまいました。

次の日から、イタリアカップに入りました。参加したのは、イタリア、アメリカ、チュニジア、アルジェリア、日本です。成績は、1勝3敗でした。それでも、この大会で、日本は、公式試合での初勝利を収めることができました。

アメリカやイタリアなど、高さや、力強いプレーで攻めてこられると、ディフェンスが下がったりします。攻撃でも、プレスディフェンスなどをされると攻めあぐみ、

ミスをよくだしていました。

イタリアカップ終了後、すぐスペインへ移動、スペインへ到着してそこから今度はバスで7時間の移動、おまけにバスの中ではキューバと一緒。ホテルに到着したときには全員ぐったりしていました。

スペインでは、アメリカ、スペイン、日本をAグループに、アルジェリア、キューバ、スペインジュニアをBグループに分けて試合を行ないました。スペイン戦では、本当に世界の強さを見せつけられたという感じがしました。アメリカ戦は、イタリアで前半の5点差を返されたこともあり、気合が入っていました。前半の1点差から最後は同点で終わることが出来ました。最終戦では、5、6位決定戦で、スペインジュニアと。ジュニアは、高さとスピードはあるが、プレー的には、まだまだなので日本と力の差がありました。

今回の遠征で多くのことを学び、また試合にも出してもらい、得点することが出来、良かったと思います。そしていろいろな体験などを、これからに役立てていきたいと思います。

田口　隆

さる2月3日から18日まで、ヨーロッパ（イタリア、スペイン）遠征に参加させて頂きました。

まずイタリアでは、チュニジア、アルジェリア、アメリカ、イタリアと対戦したわけですが、どのチームも実力的には互角で、白熱した試合が多く展開されました。わが日本チームは、1勝1分2敗という成績で4位になったのですが、あと2勝はあげることが出来たと思います。

次にスペインに渡り、ジジョンという所での大会に参加しました。参加国はスペイン、スペインジュニア、日本、アメリカ、アルジェリア、キューバの6チームで、A、Bの2グループに分かれ予選リーグが行なわれ、日本は、スペイン、アメリカとのA組に入りました。第1戦はスペインが相手でした。スペインはこの大会の前のスペインカップではユーゴ、ルーマニアを破って全勝優勝しただけに、高さとパワーにおいて日本より数段上でダブルスコアで敗れました。第2戦はイタリアで1点差で敗れているアメリカで、今度は引き分けに終わりました。その結果3位となり、B組3位のスペインジュニアと順位決定戦を行なうことになり、いくらスペインのジュニアといっても、ナショナルチームがジュニアチームに負けてなるものかと最初から力を発揮し、勝利を収める事が出来ました。

結局5位となったわけであるが、とても良い経験になりました。世界の強豪相手に今後日本が戦っていくのに、しっかりした気持ちと、スピードをもっていかなければ互角には戦っていけないと痛感しました。最後になりましたが、この遠征に参加させて頂けて大変感謝しております。

山本興道

イタリアカップ、スペインカップ、各国からナショナルチームが集まって戦ってきましたが、毎回のように思うことはパワーの違いです。守ったと思っても、そこから振り切る力強さは、日本の選手にはほとんど見うけられません。1人を2人で止めて、その瞬間にボールもデッドするディフェンス力が大切であることをしみじみ感じました。特にポストマンに対して2人で完全に止めるプレーが出来れば、かなりの失点がふせげます。また、ポストマンに対して一対一で守るのであれば、2秒ぐらいホールディング出来るパワーがあれば一番良いのですが、ピポットなどで動いて瞬間的なスピードであるプレーヤーが多くなってきているのでポストマンをサンドウィッチ出来るディフェンスが必要だと思います。

また、外国に出て公式戦やクラブチームなどとの対戦、それに日本に外国のチームをよんでもっとたくさんの試合経験をしたいと強く思います。イタリア、スペインでの9試合で少しづつチームもよくなりました。若いチームであるだけに、もっと多くの試合を経験し、各国のいいところを吸収したいと思っております。

首藤信一

今度の遠征で、私はディフェンス、オフェンス、精神の三つの事で日本にいては経験できないようなものを、私の身体自身で感じました。前まで参加していたジュニアで世界大会に行きましたが、やはりナショナルの試合はまったく違うと痛感しました。これから、私の感じた事を三つに分けて書きたいと思います。

○精神面

選手個人の考え方が、国々によってまったく違うのを感じました。今遠征でいろいろなチームと試合をしましたが、その中でも日本はゲームに対する意気込みや一試合通しての集中力、気迫が足りなかったと思いますし、私自身もゲームに対する気持が甘かったと今思います。ゲーム中に弱気になった事もありましたし、相手にやられてから、やっと自分でやりかえしに行くなど、自分で本当に甘かったと思います。この次からは、ゲームに対してそのような事がないように務めたいと思います。

ゲーム前のアップから自分自身を奮い立たせ、決して相手から逃げず、最初から相手を倒すぐらいの気迫を持ってゲームに臨みたいと思いますし、常にボールに集中していけるように少しでも努力していきたいと考えてます。

○ディフェンス

今遠征で、スペインチームのディフェンスが、自分では一番素晴らしかったと思います。決して体格、パワーに頼らず、ボール中心に全員が動き、早いつぶしで守るというものです。

日本はボールに対しての集まりが悪く、その事によって、サイドの1：1、45度の外割りなどで相手チームに得点を許してしまうケースが多かったです。たしかに1：1（個人）の力不足もありましたが、それ以上にフォローが悪かったと思います。

私はセンターで出ぎみで相手のリズムを狂わせるように守っていましたが、ボールや相手に出るタイミングが悪く、下を守ってくれた選手に迷惑をかけてしまったと思います。これから私は相手のいやがる位置を取ったり、1：1でも絶体に守るという気迫で手数を多くだし、最後まであきらめずに、しぶとく守っていきたいと思います。それに、出るだけではなく、下のセンターバックも出来るようにしていきたいと思います。

本当にこの遠征では、ディフェンスで声を出すこと、守り切るという気迫が一番大切だと思いまし

た。

チームのディフェンスとしては、常にボールに集中し、足を動かし、素速いフォローとつめで早目早目に相手の攻撃をつぶしていき、相手に抜かれるにしても不利な状態にし、高い位置を心がけていかなければならないと思います。

○オフェンス

日本は、特に攻撃でミスが許されない事を強く感じました。今のチームは、ディフェンスでリズムを取る方ではないので、攻めで確実に得点していかなければならないと思います。勝てる試合も、この事（シュートミス）によって負けたものが多くあったと思います。私も数多くはずしたと思います。

シュートの時のタイミングや位置などの考えがなく、ただ打ってしまった物もあったと思います。

それに、まだまだ位置取りが悪く、ノーマークをつくれなかったり、ポストへのパスが悪かったり、前を攻めずにパスをするので、ディフェンスプレーがきまらなかったり、今度の遠征で目標にしていた事が出来ず本当に悔いが残ります。これからは、練習中からもっと自分に厳しく、意欲的にもっとプレーしていかなければならないと痛感しました。

チームとしては、全員で常に動き、ノーマークをつくり出し、それを確実にきめていかなければならないし、相手チームのディフェンス体形に対応し、それに応じた攻めをしなければならないと思います。選手全員が攻めるポイントを考え、意志も一つになり、全員で1点を喜びあえるようになりたいです。

速攻も、日本的な位置取りではだめだと思いましたし、ボールをいかに早く攻撃するポイントにつなぐかも大事だと思います。

この次からは、この遠征で学んだこと、悔やしかったことを思い出しながら、一つでも自分にもチームにもプラスになるように頑張っていきたいと思います。

宮下和広

今回の遠征は、自分にとっては夢のような出来事でした。というのも、全日本に入りたかったけど到底無理だと思っていたからです。でも、合宿参加の通知を聞いた時はうれしい気持ちと不安な気持ちとが入り混じりなんとも言えない気持ちでした。

今回の参加名目は、テスト生という形だけど、次回の合宿にも呼んで頂けるように頑張ろうと心に誓い直前に臨みました。とは言うものの全日本の練習にどこまで付いていけるかすごく心配で、でも少なくともチームの足だけは引っぱらないようにと毎日を過ごした。ちょっと体は痛くはなかったものの、なんとか乗り切ることが出来

イタリアミラノへ向って成田を発った。イタリアのミラノ空港で荷物を受け取ったらパッケージが一つ足りないし、自分のは割れているし、迎えのバスは1時間も遅れるし、いやな事が起こるのを予知するかのようなスタートとなった。その後2時間かけてホテルへ到着した。次の日まだ時差ボケも取れないままイタリアのナショナルとテストマッチが待っていた。前半は互角の勝負だったが、後半結局力で押し切られたと言う感じで、疲れのせいかだんだんとディフェンスラインが低くなって間を割られたのが原因である。これを克服しなければ体の大きい外国勢には勝ち目はないと思う。

これを踏まえてイタリアカップに臨んだが、試合結果はアルジェリアにはなんとか勝てたものの、アメリカ、チュニジア、イタリアには負け、やはり集中力、気迫の切れかけた頃から間を割られ出しディフェンスを分散された結果に終った。

しかし、負けた試合の中にも勝ち試合を落とした悔いの残る試合もあった。アメリカ戦は、前半5点も開きながら後半自らのシュートミスで逆に相手に連続得点されてしまい、大事な一戦を落としてしまった。イタリアでの試合の反省は、まず相手に負けない気迫を持つこと、そしてシュートの確実性、あと一つは簡単なことなんだけど一番出来なかった日本語をしゃべること、これを頭に叩き込みスペインへと向った。

スペインでの移動はバスでなんと7時間という長旅でほんとにきつい移動でした。でもそんなことを言っている暇もなく、次の日からはもう大会が始まった。

第1戦目のスペイン戦には、全員一泡吹かせてやるつもりで臨んだが、まざまざと力の差を見せつけられ打つ手もなく敗れた。

この後の試合は、とにかく闘争心だけはとみんなで話し合い2試合を戦い、結果は1勝1分けという結果で終わることが出来た。

今回の遠征で感じたことは、自分よりも大きい外国の選手でも、攻守の時に休むことなくフットワークしているし、1点に対して執着心の強さは見習わなければいけない。そして心残りは、ベンチで見てて頭に思っていたことが、いざコートに立つと半分もプレー出来なかったことです。

それから、国内の試合でも同様なんですけど、技術も大事だが、まず気迫、闘争心なくして戦えないということです。

今回の遠征に参加させて頂き光栄と思うと共にただ行っただけで終らせない為にも、遠征で見たこと、体で感じたこと、スタッフに教えて頂いたことを忘れないように今後トレーニングを続けたいと思います。

第11回世界選手権

ユーゴが初優勝を飾る

第11回世界男子選手権は、2月25日～3月8日、スイスのチューリッヒなどに16カ国が参加して行なわれた。

予選リーグから波乱が連続、ロサンゼルス・オリンピックの勝者・ユーゴが激戦を切り抜け初の栄冠を飾った。

有力優勝候補ソ連、ルーマニア、西ドイツなどは6位内にも入らず、注目の韓国は12位と健闘した。

▽予選リーグA組

ユーゴ　26（13―11、13―11）22　ソ連
東ドイツ　28―24　キューバ
ユーゴ　32―28　キューバ
東ドイツ　23―18　ソ連
ユーゴ　22―20　東ドイツ
ソ連　32―23　キューバ

【順位】①ユーゴ②東ドイツ③ソ連④キューバ

▽同B組

スイス　15―15　スペイン
西ドイツ　21―20　ポーランド
西ドイツ　18―14　スペイン
スイス　18―17　ポーランド
西ドイツ　18―17　スイス
ポーランド　20―20　スペイン

【順位】①西ドイツ②スイス③スペイン④ポーランド

▽同C組

ルーマニア　23―18　チェコ
韓国　30（17―12、13―9）21　アイスランド
アイスランド　19―18　チェコ
ルーマニア　22（7―12、15―9）21　韓国
韓国　25（15―9、10―13）22　チェコ
アイスランド　25―23　ルーマニア

【順位】①韓国2勝1敗（得失点差9）②ルーマニア2勝1敗（4）③アイスランド2勝1敗（マイナス6）④チェコ

▽同D組

スウェーデン　24―16　アルジェリア
ハンガリー　25―21　デンマーク
デンマーク　27―18　アルジェリア
ハンガリー　23―22　スウェーデン
ハンガリー　23―19　アルジェリア
スウェーデン　24―21　デンマーク

【順位】①ハンガリー②スウェーデン③デンマーク④アルジェリア

▽13―16位決定リーグ

チェコ　27―23　キューバ
ポーランド　28―23　アルジェリア
チェコ　23―22　ポーランド
ポーランド　27―23　キューバ
キューバ　25―24　アルジェリア
チェコ　24―19　アルジェリア

【順位】⑬チェコ⑭ポーランド⑮キューバ⑯アルジェリア

ソ連、スペインにも敗る

▽準決勝リーグ1組

ユーゴ　18―17　スペイン
東ドイツ　23―16　スイス
ソ連　23―20　西ドイツ
東ドイツ　24―15　西ドイツ
ユーゴ　27―19　スイス
スペイン　25―17　ソ連
ユーゴ　19―17　西ドイツ
スペイン　21―19　東ドイツ
ソ連　24―15　スイス

ユーゴ×ソ連、ユーゴ×東ドイツ、ソ連×東ドイツ、スペイン×スイス、スペイン×西ドイツ、スイス×西ドイツは予選リーグの記録を適用

【順位】①ユーゴ5戦全勝②東ドイツ3勝2敗③スペイン2勝1分2敗④ソ連2勝3敗⑤西ドイツ2勝3敗⑥スイス1分4敗

（注）ソ連、西ドイツの順位は「25％ルール」を適用

▽同2組

デンマーク　31（13―10、18―17）27　韓国
スウェーデン　25―20　ルーマニア

（注）試合後の検査でルーマニアGKシミオンにドーピング反応があり、国際ハンドボール連盟はこの試合を没収、公式記録はスウェーデン10―0ルーマニアと処理された。

ハンガリー　21―20　アイスランド
スウェーデン　29（17―11、12―15）26　韓国
アイスランド　25―16　デンマーク
ハンガリー　19―17　ルーマニア
スウェーデン　27―23　アイスランド
ハンガリー　34（18―12、16―16）28　韓国
デンマーク　18―16　ルーマニア

スウェーデン×ハンガリー、ハンガリー×デンマーク、デンマーク×スウェーデン、韓国×ルーマニア、アイスランド×韓国、ルーマニア×アイスランドは予選リーグの記録を適用

【順位】①ハンガリー5戦全勝②スウェーデン4勝1敗③アイスランド2勝3敗④デンマーク2勝3敗⑤韓国1勝4敗⑥ルーマニア1勝4敗。（注）3、4位はIHF25％ルールによりルーマニア、韓国戦のスコアを除外、5、6位は当核カードの勝敗による。

▽11・12位決定戦

スイス　27（13―11、14―11）22　韓国

	【韓国】	得
GK	林圭夏	0
FP	金在煥	1
	中栄錫	0
	朴道憲	4
	林在植	0
	黄約那	5
	姜在源	7
	季	3
	林	1
	林	1
PT	(2)	22

	【スイス】	得
GK	ヒュールリマン	0
	ペ　コ　ウ	0
FP	フェイグル	1
	バッチマン	2
	ウェーベル	6
	シャール	0
	ルビン	6
	シューマッハー	0
	プラッツァー	2
	モール	4
	P・イエール	3
	デルヒーズ	3
PT	(0)	27

▽9・10位決定戦

ルーマニア　25（13―11、12―10）21　ソ連

▽7・8位決定戦

西ドイツ　25（14―8、11―10）18　デンマーク

▽5・6位決定戦

スペイン　24（14―12、10―10）22　アイスランド

（得点者）ス＝セラーノ8、レイノ6、ムニョス3、ルイス、プイグ各2、フェルナンデス、ミリアン、ガルシア各1。

ア＝ギスラソン6、ヒルマルソン、B・I・グッドムンドソン各5、シグルドソン3、オラフソン2、B・O・グッドムンドソン1。

▽3・4位決定戦

東ドイツ　24（11―12、13―11）23　スウェーデン

〔得点者〕東＝クルーガー8、ホウック5、ヴィーゲルト4、ヴァール3、ヴィンセルマン2、ピソール、ボルシャルット各1。

ス＝ジルセン7、ヤールファグ5、カーレン4、ヴィスランデル、ベントソン、ハヤス各2、カールソン1。

▽決勝戦

ユーゴ 24（12－12、12－10）22 ハンガリー

【ハンガリー】

	選手	得
GK	ホフマン	0
GK	オロシュ	0
FP	P・コバクス	5
FP	M・コバクス	2
FP	フォドール	1
FP	ケニエレス	0
FP	イバンスチク	5
FP	スザボ	1
FP	ホルバス	3
FP	コントラ	1
FP	ギュルカ	2
FP	マロシ	2
PT	(0)	22

【ユーゴ】

	選手	得
GK	バシッチ	0
GK	アルナウトビッチ	0
FP	ルニッチ	1
FP	ブコビッチ	1
FP	サラセビッチ	2
FP	エレゾビッチ	0
FP	グルビッチ	1
FP	ムルコーニヤ	3
FP	ブヨビッチ	4
FP	クベトコビッチ	6
FP	ホルペルト	0
FP	イサコビッチ	6
PT	(3)	24

【個人得点ベスト5】①姜在源（韓国）67②ドラノナ（キューバ）50③ジルセン（スウェーデン）47④P・コバクス（ハンガリー）45⑤アラソン（アイスランド）41

□…東ヨーロッパ勢がロサンゼルス・オリンピックを棄権したことから、この大会は、はじめからシード順が、これまでとは大きく変っていた。

その影響で大会第1日、いきなりユーゴ×ソ連戦というビッグカードが行なわれ、第2日にはユーゴ×東ドイツ、第3日にはソ連×東ドイツとつづいた。

そのせいでもあるまいが、大会は波乱につぐ波乱で、プレスセンターは、各地の結果が伝えられるたびに騒々しい声がとびかった。

3強のつぶし合いは、ユーゴのコンディショニングの勝利となり気落ちしたソ連は、準決勝リーグでも奮起を示さぬままに終り、前回の覇者が10位に落ちこむという誰もが想像しない惨めな結果になった。

予選リーグを混とんとさせたもう一方の主役は韓国。

いきなりアイスランドを押しつぶし、つづくルーマニア戦も残り10分19－18とリード、この善戦が自信となってチェコ戦は残り16分16－20からの大逆転に実り、堂々のベスト12進出となった。

韓国の戦いぶりは、アイスランドを刺激し、第3日にルーマニアから逆転勝ちをおさめる。

ルーマニアにとっては痛恨の1敗で、このショックとエース・スティンガの負傷、さらにはドーピング違反が重って、準決勝リーグは1勝もマークできず9位という転落で終った。

西ドイツも大会直前、ネイツェルの負傷欠場というアクシデントがあり、ヴンダーリッヒが30ゴールをかせぎ出したもののパンチに欠け、これまた不本意のままスイスを去った。

ホスト国スイスは、予選を切り抜けたものの、最終戦で韓国を制したのがせめてもの慰めだった。

□…こうした乱調組のスキをついてユーゴ、ハンガリーは、実に巧く日程をこなした。両国の実力は評価されていたものの、どちらかといえばダークホース的存在。

それがユーゴは、序盤の2強戦を連勝で飾り波に乗った。

ハンガリーも混戦の切り抜けには、かねてから定評があり、その持ち味が存分に発揮された、といってよい。

スペインもリズムをつかんだら手強いという伝統のカラーを生かし、尻上りの好調、6位に滑りこんだ。

ロサンゼルス以来、惑星的存在として専門家からの株をあげているアイスランドは、韓国にたたかれながら盛り返しての5位突入はみごと。ルーマニア、デンマークを攻め崩した試合は、大会中盤のハイライトといえた。

東ドイツ、スウェーデンが手固く3、4位を占めたのは、やはり伝統の力といえるだろう。

東ドイツは、まさかと思ったスペイン戦の不覚が悔やまれる。

スウェーデンも終ってみればハンガリー戦の逆転負けがなんとも惜しい。

□…初優勝したユーゴは、全員のムラのない攻守が勝因。

チームワークの固さも光るものがあり、予選の難敵を降したあと気をゆるめることなく、秀れた集中力で準決勝リーグを突破した戦いぶりは、王者にふさわしいものがある。試合ごとにヒーローの代る層の厚さも大きな武器だし、GKバシッチ、アルナウトビッチの使い分けも巧かった。

韓国の健闘は、本場のライターたちが筆を揃えて絶讃した。

予選の好調を後半戦に持ちこめず2勝5敗174得点179失点という結果に留ったが、その実力が、はっきり“世界レベル”であることを強く印象づけた。全員のスピード×ジャンプ力に富んだ攻撃は、ファンの目を引きつけ、攻めて攻めて攻めまくるプレーは、本場にも大いにアピールした、といえる。

姜在源がリーディングゲッターになったのも快挙といえ、ソウル・オリンピックでのメダル獲得は、けして夢ではなくなった。姜は昨年12月の世界ジュニアでも得点王。

なお、今大会の上位6位（ユーゴ、ハンガリー、東ドイツ、スウェーデン、スペイン、アイスランド）にソウル・オリンピック出場権が与えられ、ソ連、ルーマニア、西ドイツなどは、来年3月イタリアで行なわれる世界選手権Bグループに回り、ここで二枚のソウル行きチケットを争うことになる。

ハンドボールプレーヤーの体力に関する横断的研究
―12～23歳―

日本ハンドボール協会
トレーニングドクター群

阿部徳之助　宇津野年一　新井節男　森田俊介　山崎　武　小山啓央　水上　一　竹内正雄　早川清孝　土井秀和　福井孝明　栗岩淳一　宮澤恒夫

はじめに

日本ハンドボール協会では、ハンドボール競技者の能力調査や体力開発向上の促進を目的として、ハンドボール競技適性診断の手引き書[1]を作成した（S60年3月1日発行）。これによると、以下のとおり、三段階に分類されている。

第一段階テスト→文部省のスポーツテストを採用した。

第二段階テスト→ハンドボールの競技特性にみあった7項目を選び、より高度な技術を習得するための基盤となる専門的体力づくりの目標レベルを示している。

第三段階テスト→ハンドボールトップのプレーヤーが保持しなければならないとおもわれる、体力5項目を示している。

今回は、第1段階から第3段階までのテストを12歳～23歳までの男女ハンドボールプレーヤー39 15名を対象に実施し、体力の傾向を検討するとともに、今後のハンドボール競技力向上の資料にしようとしたものである。体力測定は昭和60年4月から同年10月に行なった。

[方法]

〈体力測定項目〉

。第1段階

身長・体重、反復横とび、垂直とび、背筋力、握力、踏み台昇降運動、伏臥上体そらし、立位体前屈、50m走、走り幅とび、ハンドボール投げ、懸垂（男子・懸垂腕屈伸、女子・斜懸垂腕屈伸）、持久走（男子・1500m、女子・1000m）。

。第2段階

ボール置き換え前後シャトルラン、時間往復走、立ち五段とび、サイドスライドステップ、ジグザグドリブル、腕立拍手、ハンドボール遠投。

。第3段階テスト

12分間走、バービー・フットワーク、助走つき垂直とび、20m往復ジャンプ、33mスロー。

以上それぞれの各プレーヤーは、三段階のうちのいずれか一つの段階を実施した。

[結果]

(1) 第1段階テスト

図1―1～図1―4は、男女の第1段階テストの結果である。

身長についてみると、12歳男子155・9±8・74cm、女子154・3±5・65cmで、僅か1.6cm差であるが、男子は、15歳で169・7±5・73cmと急激に伸びるのに対し、女子は159・1±5・81cmであまり伸びがみられない。20歳男子は、182・1±5・92cmと最も高い値を示した。

またこれを、全国平均値の同年齢者[2]と比較すると、男子では、いずれの年齢においてもハンドボールプレーヤーの方が高い値を示し、

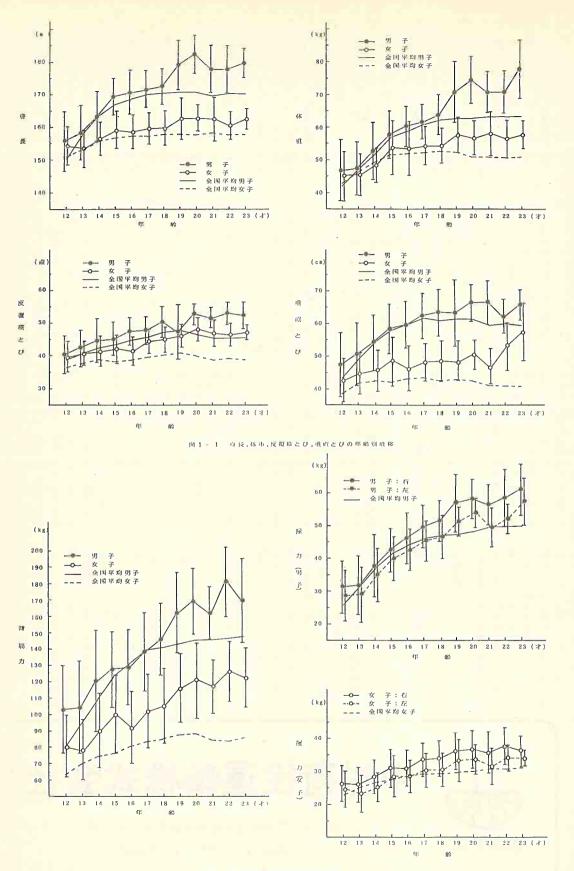



図１－１　身長，体重，反復横とび，垂直とびの年齢別推移

図１－２　背筋力，握力の年齢別推移

19歳以降では、明かにハンドボール選手の方が一般人よりも高い値であった。

一方女子でも、男子とほぼ同じような結果を示した。

次に体重をみると、男女とも身長とほぼ同じような傾向がみられた。

反復横とびについてみると、男子の12歳では40・4±5・08点、16歳47・5±4・43点、23歳52・3±4・18点であり、女子の12歳では39・9±4・63点、16歳41・3±4・33点、23歳47・2±2・30点であり、加齢とともに男女とも向上傾向がみられる。

男子は、12歳から23歳までの間に12点の増加であり、女子では7点の増加であった。これを全国平均と比較すると、いずれの年代においても、男女ハンドボール選手の方が高い値を示した。

垂直とびについてみると、12歳男子47・4±9・81cm、女子42・7±6・60cmで男子の方が女子よりも4.7cm高い値を示した。男子は21歳まで増加がみられたが、22歳で減少している。女子では、12歳から15歳までの増加を示し、16歳ではこれまでの値よりも減少しており、ここから20歳までわずかながら増加し、21歳では、再び低下し、その値は14歳と同じであり、22歳52・8±7・28cm、23歳57・4±8・74cmと最も高い値を示している。

これを全国平均と比較すると、男子では、13歳から17歳までは、ハンドボール選手とほぼ同じ値を示し、18歳以降では、全国平均よりも高かった。女子では、いずれの年代においても高い値を示した。

背筋力についてみると、男子の12歳103・7±26・83kg、22歳181・2±21・60kgであった。女子の12歳80・9±19・02kg、22歳126・6±18・20kgで、男女とも加齢とともに増加が認められた。全国平均値と比較してみると、男女とも19歳以降は、ハンドボール選手の方が高い値を示している。

握力についてみると、男子では、12歳から23歳まで年齢とともに増加し、女子は男子ほど急激な増加ではないが、ゆるやかな上昇で23歳まで達している。また、左右の比較では、男女ともに右の筋力の方が優れている。

伏臥上体そらしでは、男女とも12歳から23歳まで、あまり変化はなく、50cmから60cmの範囲にあり、全国平均値との比較では男女とも差はみられない。

立位体前屈は、男子の12歳から20歳まで増加がみられるが、21歳以降は減少している。

一方、女子でも同じような傾向を示している。これを男女で比較してみると、女子のほうが男子よりも優っており、全国平均値とでは、男子の値とほぼ同じ傾向にある。

踏み台昇降運動についてみると、男子12歳71・1±12・41、女子69・3±11・45を示し、男女18歳まで増加し、女子では19歳以降で増加はみられなかった。男子では、20・21歳と最も高く、23歳では、66・4±6・96で低い値であった。全国平均値との比較では、ハンドボール選手の方が高い値を示している。

50m走についてみると、男子12歳8.2±0・56秒、女子8.5±0・55秒であり、男女とも23歳まで、時間が短縮されている。これを全国平均値と比較してみると、男子では、12歳から14歳までは、ほとんど差はないが、15歳以降は、ハンドボール選手の方が速い。一方女子では、12歳から23歳まで、ハンドボール選手の方が、はるかに優れている。

走り幅とびについてみると、男子12歳3・76±0・58m、女子3・26±0・39mであり、23歳男子5・15±0・32m、女子3・81±0・35mとピークに達している。これを全国平均値と比較すると、男女ともいずれの年代においても、ハンドボール選手の方が高い値を示した。

ハンドボール投げについてみると、男子12歳24・6±5・93m、女子17・9±4・10mであった。男女ともここでも加齢とともに増加がみられ23歳でピークに達している。全国平均値とでは、男女ともハンドボールの選手が高い値を示した。

懸垂についてみると、男子と女子とでは、測定方法の違いから比較することはできないが、男女とも加齢によって、波動的であるが23歳まで増加している。これをまた、全国平均値と比較してみると、男子は、12歳から16歳までほぼ同じ値であり、17歳、18歳、20歳をのぞけば、大きな差がみられない。一方女子では、ハンドボール選手の方がはるかに大きい値を示している。

1500m走の男子についてみると、12歳382・5±39・01秒が23歳319・3±14・37秒を示し、63・2秒間も速くなっている。一方、1000m走女子では、259・9±20・64秒が23歳233・8±15・75秒で、26・1秒速く、ここでも加齢にともなって男女とも時間が短縮されている。これを全国平均値と比較してみると、男子では、16歳以降23歳までハンドボール選手の方がよい値を示した。また女子では、12歳から加齢につれて、ハンドボール選手の方が速い。

【考察】

形態的には、世界の趨勢として、年々大型化の傾向にある。阿部[13]らは、ハンドボール歴代オリンピック選手と日本代表選手の体力の比較において日本代表選手の身長は、180・8cm、西ドイツ189・3cm、ア

図1－3　伏臥上体そらし，立位体前屈，踏み台昇降，50m走の年齢別推移

図1－4　走り幅とび，ハンドボール投げ，懸垂，1500m走（男子），1000m走（女子）の年齢別推移

メリカ・ソ連188・5 cm、ルーマニア187・9 cm、日本代表の値に最も近い値がチェコの181・5 cmである。本研究の20歳が182・1 cmであるが、21・22歳と減少し、23歳では、179・6 cmで外国勢と比較するとさらに長身選手の発掘が早急に行なわなければならない。

また、体重は身長と同様18歳頃まで全国平均値とあまり差はみられないが、19歳以降急激に増加がみられる。このことは、身体接触が起こった時相手をはじきとばす、あるいは威圧感を与えることにおいても重要と考えられる。

次に機能面をみると、反復横とびと50 m走は身体移動の敏捷性能力をとらえるものと考えられる。石井[4]は、ハンドボール選手の競技適性の尺度として測定することが必要であると報告している。浅見ら[5]は、サッカー選手の体格・体力を横断的に、小学校5年から高校3年までみている。それによると本研究の12歳（中学1年）の反復横とびは、47・4点、サッカー40・3点で、ハンドボールの方が7.1点高い値を示した。また、17歳（高校3年）では、ハンドボール選手62・2点、サッカー選手46・3点で15・9点とハンドボールの方が明らかに高い値を示している。これは、ハンドボールとサッカーのコートの大きさや競技種目の違いによるものと考えられる。50 m走は、サッカーの中学1年8.0秒、

表1－1　男子第1段階テスト測定結果

項目		年齢（人数）	12 (92)	13 (154)	14 (185)	15 (127)	16 (97)	17 (129)	18 (136)	19 (27)	20 (28)	21 (17)	22 (12)	23 (12)
身長 (cm)		M	155.9	158.1	163.4	169.7	170.7	171.8	172.7	179.1	182.1	177.9	177.9	179.6
		S．D	8.74	8.45	7.61	5.73	6.91	5.76	5.57	7.65	5.92	7.46	7.15	4.51
体重 (kg)		M	46.7	47.4	52.9	57.6	60.2	61.6	63.6	70.8	74.4	70.9	70.8	77.82
		S．D	9.30	8.31	8.81	7.32	6.13	5.33	6.17	9.3	9.03	6.90	6.55	8.19
反復横とび (点)		M	40.4	42.4	44.7	45.1	47.5	47.6	50.4	47.3	52.9	51.6	53.0	52.3
		S．D	5.08	5.55	6.67	5.24	4.43	4.43	4.96	8.40	3.21	3.49	3.41	4.18
垂直とび (cm)		M	47.4	50.7	54.1	58.3	59.5	62.2	63.3	63.0	66.3	66.3	62.1	65.8
		S．D	9.81	9.55	8.66	7.64	7.30	7.07	7.34	10.16	5.78	6.85	5.28	4.62
背筋力 (kg)		M	103.7	104.8	120.5	127.5	128.8	138.4	146.6	162.1	169.0	162.6	181.2	169.5
		S．D	26.83	28.62	31.25	23.83	23.19	24.09	22.28	24.55	20.09	16.07	21.60	25.84
握力 (kg)	右	M	31.4	31.9	37.9	42.8	46.2	49.7	51.6	57.0	58.4	56.5	58.5	61.2
		S．D	8.62	9.03	9.74	6.85	7.92	6.81	6.34	8.98	6.07	6.28	8.67	7.95
	左	M	28.9	29.2	35.1	40.1	42.9	45.6	46.9	51.4	54.1	49.8	52.3	57.5
		S．D	7.86	8.50	8.39	6.95	6.40	6.43	6.52	4.99	4.87	6.02	4.48	7.36
伏臥上体そらし (cm)		M	49.6	50.9	54.2	56.1	57.9	58.9	60.8	55.2	57.8	55.3	55.6	49.6
		S．D	8.46	9.13	10.05	7.21	8.10	8.99	7.99	9.62	8.85	10.40	7.48	8.78
立位体前屈 (cm)		M	8.5	9.9	10.9	10.5	12.1	13.3	13.7	13.0	14.7	12.3	14.1	10.3
		S．D	6.40	8.18	8.82	7.29	5.75	7.05	6.68	4.47	5.35	7.21	3.80	4.93
踏み台昇降運動 判定(指数)		M	71.1	72.2	74.8	76.7	77.1	78.6	78.5	79.5	106.4	93.4	75.2	66.4
		S．D	12.41	12.46	12.29	12.21	11.81	14.33	11.53	36.19	38.96	28.97	14.75	6.96
50 m 走 (秒)		M	8.2	8.1	7.7	7.4	7.3	7.1	7.0	7.1	6.9	6.9	7.0	6.8
		S．D	0.56	0.76	0.57	0.44	0.42	0.35	0.32	0.38	0.30	0.30	0.33	0.15
走り巾とび (m)		M	3.76	3.84	4.14	4.45	4.52	4.69	4.79	4.82	4.78	4.87	4.98	5.15
		S．D	0.58	0.64	0.52	0.42	0.43	0.46	0.44	0.48	0.43	0.45	0.49	0.32
ハンドボール投げ (m)		M	24.6	26.0	30.2	33.6	33.91	37.04	38.64	39.06	41.95	40.90	39.65	41.32
		S．D	5.93	6.27	6.02	5.72	4.88	4.79	4.53	4.99	4.08	4.86	4.09	2.07
懸垂 (回)		M	3.9	4.6	6.9	6.7	7.5	11.3	13.2	10.5	15.3	12.6	11.1	12.0
		S．D	4.55	4.46	6.99	3.25	3.92	5.18	5.66	4.59	17.33	5.20	3.12	5.83
1500 m 走 (秒)		M	382.5	374.4	359.8	346.2	345.3	327.3	320.8	327.7	326.7	313.6	307.1	319.3
		S．D	39.01	51.94	43.78	28.82	22.74	31.57	26.16	22.19	35.23	26.81	42.56	14.37

同年齢のハンドボール選手は、8.2秒で、高校3年生との比較では、サッカー6.8秒、ハンドボール7.1秒と0.3秒ハンドボール選手の方がおそかった。

次にパワーの指標となる垂直とびは、男子は一般人といずれの年齢においてもわずかに上回っているだけである。一方女子をみると、12歳から23歳までいずれの年齢でも、一般人よりも高い値であった。走り幅とびも垂直とびと類似した傾向がみられた。

筋力については、握力、背筋力、懸垂を用いてハンドボール選手の年齢別変化をみた。サッカーのワールドユース候補選手と比較すると、ハンドボール選手の握力(右)58・4kg、(左)54・1kg、背筋力169・0kg、懸垂15・3回であった。これに対して、サッカー選手の握力(右)49・6kg、(左)46・0kgでありハンドボール選手が高い。これはボールを握ってプレーする種目と、足でボールを扱うという種目の違いによるものと考えられる。また、背筋力はサッカー選手137・3kgでハンドボール選手が31・7kgも低かった。

呼吸循環系の指標となる1000m、1500m走および踏み台昇降運動では、ハンドボール競技では、一試合30分から60分間を休むことなく動くためには、有酸素的能力が必要である。一般人よりも明らかに高い値を示している。

表1－2　女子第1段階テスト測定結果

項目 ＼ 年齢（人数）			12 (63)	13 (114)	14 (108)	15 (79)	16 (133)	17 (144)	18 (132)	19 (59)	20 (25)	21 (20)	22 (17)	23 (13)
身長 (cm)		M	154.3	153.5	156.8	159.1	158.8	159.8	159.9	162.9	162.9	162.5	160.7	162.5
		S．D	5.65	5.77	5.01	5.81	5.26	4.95	5.07	5.07	4.39	6.94	4.29	3.33
体重 (kg)		M	45.2	45.5	48.2	53.9	53.5	54.1	54.3	57.7	56.6	58.0	56.5	57.6
		S．D	7.79	6.43	5.45	8.31	6.26	5.72	5.04	5.47	5.21	6.99	5.83	4.17
反復横とび (点)		M	39.9	40.9	41.4	42.2	41.3	44.3	44.9	46.2	48.2	46.9	46.6	47.2
		S．D	4.63	3.81	4.77	4.45	4.33	3.87	3.99	3.56	3.57	3.91	3.46	2.30
垂直とび (cm)		M	42.7	44.6	45.9	48.5	46.2	48.2	48.5	48.3	50.4	46.8	52.8	57.4
		S．D	6.60	6.20	6.42	7.28	6.54	5.50	6.25	6.01	4.41	5.49	7.28	8.74
背筋力 (kg)		M	80.9	78.3	90.1	100.6	92.9	102.8	105.6	116.5	121.2	117.5	126.6	122.5
		S．D	19.02	18.71	23.4	24.34	22.08	22.93	23.08	21.15	22.81	16.47	18.20	18.76
握力 (kg)	右	M	26.3	26.1	28.5	31.2	31.0	33.5	33.8	36.3	36.8	35.8	37.8	36.4
		S．D	5.48	5.20	5.32	5.48	5.41	5.02	5.36	5.66	5.71	6.46	5.67	4.65
	左	M	24.8	23.4	25.3	28.8	28.6	30.5	30.5	33.4	33.7	31.8	34.2	34.2
		S．D	5.50	5.62	4.87	6.04	5.06	5.40	5.08	6.49	4.62	5.51	4.02	2.83
伏臥上体そらし (cm)		M	56.3	54.7	56.7	55.9	55.9	58.3	59.0	59.5	56.6	61.7	59.0	58.5
		S．D	6.64	6.98	6.66	8.45	7.85	6.74	7.38	6.48	8.05	5.61	6.45	7.46
立位体前屈 (cm)		M	12.9	13.3	15.1	15.7	14.4	16.7	15.9	17.3	18.4	19.3	18.4	16.6
		S．D	5.38	5.39	5.76	4.62	5.83	5.12	4.51	4.99	4.54	4.17	5.74	5.39
踏み台昇降運動 判定(指数)		M	69.3	69.7	70.5	73.4	71.1	77.7	79.8	71.9	75.4	69.2	77.3	77.5
		S．D	11.45	10.19	13.44	12.65	12.42	13.71	14.13	11.84	14.33	10.36	11.11	12.33
50m走 (秒)		M	8.5	8.3	8.1	8.2	8.2	7.9	7.9	7.8	7.7	7.5	7.5	7.4
		S．D	0.55	0.53	0.45	0.51	0.50	0.39	0.45	0.36	0.30	0.30	0.30	0.23
走り巾とび (m)		M	3.26	3.29	3.47	3.46	3.47	3.57	3.67	3.82	4.00	3.58	3.74	3.81
		S．D	0.39	0.39	0.37	0.42	0.37	0.34	0.34	0.42	0.43	0.23	0.31	0.35
ハンドボール投げ (m)		M	17.9	19.9	22.5	23.1	22.81	25.12	27.15	29.45	28.94	29.82	31.41	32.38
		S．D	4.10	3.93	3.92	4.41	3.86	3.44	4.34	4.01	4.89	4.56	3.64	1.98
懸垂 (回)		M	27.4	33.6	34.3	31.8	36.7	44.5	44.5	41.8	37.0	44.6	49.3	44.5
		S．D	10.24	13.78	13.39	12.51	13.63	12.43	13.88	15.72	13.04	8.90	10.56	8.93
1500m走 (秒)		M	259.9	256.0	249.6	257.5	261.4	245.0	239.6	236.4	233.6	229.4	225.3	233.8
		S．D	20.64	22.66	22.06	24.64	24.62	21.32	19.05	31.87	23.28	30.67	29.41	15.75

出場を含めて7870マルク（約629600円・手取りの小遣いとして)。

以上、小計1人当たり約120万円の報酬が支給されることになる。

そして、また第11回世界男子選手権（WM）で優勝した場合、ドイツスポーツ援助協会——10000マルク（約80万円)、決勝戦に出場した場合——7500マルク（約60万円)、3位の場合——5000マルク（約40万円）

以上が Bild Sport の記事に掲載されている。

その他には各企業メーカーのスポンサー料が加算されるので見当がつかない。(推定として約400万円位になるのではないかといわれている)。

但し、スポンサー料の金額は、選手個人の契約でその差はかなりの幅が出るものと考えられる。即ち、コートに出る選手とベンチに座っている選手の宣伝効果は大きな差があるというもの。

このように、ヨーロッパではサッカーの他にも多くのプロスポーツがあり、ハンドボールは現在プロではないが実質的にはプロと同様、クラブとの契約金でトレードされ、高額の金銭の割り出しで動いている。現在はスター的存在であっても、10年後には次第に記憶に薄くなっていくわけであるから、トップスターで活躍する間に将来の生活資金、財産を畜えていくことになり、保障とスポンサーとの契約金など金額の計算の上でプレーをすることになる。

ハンドボール選手として知名度の高い選手に成長することは、当然将来の生活設計の保障を計算の上で前提条件としてのナショナルプレーヤーで地位・名誉の確保は、当然の結果であるといわねばならない。そうでなければナショナルプレーヤーになる必要はないのである。選手であると同時に商品的価値としての自覚の上で選手は努力しているのである。

このようなヨーロッパ全体のスポーツ界の中で、スポーツを支える経済的なバックボールは到底はかり知ることが出来ないぐらいスポーツ団体、企業が投資する宣伝経費を投じる資産は全く以て未知数の動きである。

ヴンダーリッヒがスペインへトレードされた際1億8千万と聞くが、ヨーロッパと日本との国情の差は生活圏の違いばかりではない。今日本ハンドボール界がアジア地区の中でも至難のワザとなって来ている現状をみると、ヨーロッパにおけるハンドボール界の動向は日本のスポーツ会を占うプロ・アマの問題以上の次元の異なる世界での動きとして現実に世界チャンピオンを目指して堂々としのぎを削っているのである。

スポーツ・ハンドボールを趣味程度の追求に終ることなくその極限に挑戦することによって、結果として一つの報酬が支払われても当然である。今までの国体の優勝の背景には開催府県のばく大な強化資金が投入されていることをみても、プロとアマの言葉の差ではなくその接点を実際に規定することは常にむつかしい問題であるように思える。

いずれにしても、国体を含めたスポーツのおかれている地位は不確定な要素が多すぎ、社会的認識と評価は旧態依然とした低迷さを脱皮出来ない立場にあるといわざるを得ない。その流れはスポーツ界全体に波及しており、ある意味で選手個人の大きな迷いを与えているように思える。

A級選手の選手寿命が短いのも、その点に原困があると考えられる。

企業は仕事優先の次にスポーツが置かれている以上、一つの枠をはみ出すことが出来ない状態にあるのが日本の一般的な実情である。したがって、日本のスポーツのおかれている位置づけの問題、地位の格上げの問題は企業がらみの今後の大きな課題といえよう。

次回の1990年の世界男子選手権がチェコスロバキアに決定したようで、日本ハンドボール界の決定はアジアに於てもさらに大きな悲願の関門になりそうである。

小西博喜氏の西ドイツ通信

選手に“賞金”が与えられる

私はこのたび昭和60年度文部省在外研究員として、去る２月１日大阪空港を発ち、７月31日までの６カ月間、西ドイツハンブルグ大学スポーツ科学部ティーバルド主任教授のところへ来ております。

２月７日の夜ハンブルグスポーツホールに於てＤＨＢ主催（西ドイツハンドボール協会）の男子国際試合にビルケフェルド事務局長の招待を受けました。（ティーレ会長はリスボンへ所用のため不在）。

この企画は２月25日から３月６日までスイスで開催される第11回世界男子ハンドボール選手権大会に1988年ソウル・オリンピック出場権の６位までがかかっているため、西ドイツハンドボール協会は、今トップ人気のサッカー、テニス（ベッカー）に負けじとかつてのハンドボール王国の再現をねらって、主脳陣の神経はすべてそちらに集中していることは確かである。歓談中にショーベル監督が、“世界男子選手権以外に今は何も考えられない”ということを聞いても必死の構えのようだ。

そこで、西ドイツハンドボール協会はその前哨戦として、予選グループで顔を合わせないチームで互いの戦力を打診しながら決勝リーグ進出をねらっていることは間違いない。

〈試合結果〉

西ドイツ （Ｂグループ）	32―18	チェコ （Ｃグループ）
スウェーデン （Ｄグループ）	24―20	東ドイツ （Ａグループ）

ところで、西ドイツが世界の巨砲として誇るヴンダーリッヒ（29歳、204cm、国際試合133試合、474得点）で一発巻き返しをねらっているのも事実だが、期待のヴンダーリッヒはこの日の試合に出場せず、観衆約4000名の注目を集めながら、彼の欠場に対して観衆も心得たもので不満の声（ブーブー）は出なかった。私にとっては到着早々のことでもあり、はやる気を押さえながら一目健在ぶりを見せて欲しかっただけに物足りない夜になった。本人は医師と相談して決めるといっているが？　練習量は何ら変らない程やっているというのだから、他国の偵察の目をはずすその辺のカケヒキも仕方がないようにも思える。

西ドイツは、昨年京都で全日本と対戦したフラッツ（TUSEM エッセン、国際試合56）の速攻とスカイプレー、小柄の身体ではあるがサイドで下半身のバネは抜群の確実なシュートをみせたシュベンカー（THW キール、国際試合51）で前半の中盤から一気に７点差のゴールでリードを奪った。さらにヴンダーリッヒに次ぐ大物フライスラー（グロスタット、国際試合111）が恵まれた体格から高さと力でスピードを加えた豪快なシュートで一方的に押し勝ち、各国の報道陣も含めて煙に巻いてしまったのはおもしろい。

翌日（２月８日）の朝刊（Bild Sport）の記事には「1982年のＷＭに見られたようなヴンダーリッヒのワンマンショーのチームではない」という見出しをつけ、そして総合力のチームで得点がはじけるチームに変ったことを指摘し、細く説明していた。

そして２月11日の同新聞で異様な記事を発見したので紹介する。

まず、「世界男子選手権のタイトル権利料」西ドイツハンドボール協会は20000マルク（約160万円）の報酬を出すという賞金付の数字が大きく見出しで出された。

原文のまま

「Handball—WM：20000 Mark fürden
Titelgewinn
Sehnelle Einignng Zwischen
Nationalspielern und DHB—präsidium」

以上が活字の見出しであり、一瞬驚いた。

そして、次の詳細な解説が記事として出されている（要点のみ）。

サッカーは10万マルク（約800万円）

ハンドボールは２万マルク（約160万円）

1978年（スランツェル監督の時）は、タイトル権料として、4000マルク（約32万円）＋テレビ＋金の腕輪が報酬として与えられている。

今回のＤＨＢは81日間のトレーニングコース（ナショナルチームとして総合強化合宿・遠征）を実施した者に対して、ＤＨＢより１日１マルク（約800円）＋内務省より１日75マルク（約6000円）＋ドイツスポーツ援助協会より１カ月150マルク（約12000円）、さらに81日間の中には国際試合、世界男子選手権

各地の記録から…

愛知県高校新人大会

◎東三河支部予選（9月15、16日／豊橋工業高）

〈男子〉

▼1回戦
国府 18－16 新城東
時習館 27－12 豊丘
三谷水産 16－13 豊橋商
豊橋工 19－7 豊橋東
桜丘 26－18 蒲郡
蒲郡東 不戦勝 新城
豊橋西 15－6 豊橋南

▼2回戦
国府 16－14 豊川工
時習館 27－10 三谷水産
豊橋工 18－15 桜丘
豊橋西 29－11 蒲郡東

▼準決勝
国府 15－14 時習館
豊橋西 14－10 豊橋工

▼3位決定戦
時習館 15－13 豊橋工

▼決勝
国府 17－14 豊橋西

※国府、豊橋西、時習館は県大会へ。

〈女子〉

▼1回戦
宝陵 18－12 国府
時習館 27－2 新城
豊橋南 17－5 豊丘
蒲郡東 17－13 豊橋東

▼2回戦
豊橋商 19－15 宝陵
新城東 20－8 時習館
蒲郡 12－11 豊橋南
豊橋西 18－15 蒲郡東

▼準決勝
新城東 22－8 豊橋商
豊橋西 15－7 蒲郡

▼3位決定戦
蒲郡 21－13 豊橋商

▼決勝
豊橋西 24－15 新城東

※豊橋西、新城東、蒲郡は県大会へ。

◎西三河支部予選（11月3、4、10日／岡崎東高）

〈男子〉

▼1回戦
豊田南 37－10 刈谷工
愛教大附 16－10 幸田
刈谷 16－10 岡崎工
西尾 不戦勝 安城
碧南 26－9 知立
碧南工 12－8 三好
安城東 13－10 豊田工
岡崎 16－6 一色
岡崎西 23－16 高浜
安城南 13－8 衣台

▼2回戦
岡崎城西 19－12 豊田南
刈谷 20－9 愛教大附
西尾東 19－14 西尾
岡崎東 16－9 碧南工
刈谷北 24－8 碧南
安城東 13－12 三河
岡崎 18－8 岡崎西
岡崎北 19－4 安城南

▼3回戦
岡崎城西 25－11 刈谷
岡崎東 12－9 西尾東
刈谷北 18－13 安城東
岡崎北 10－6 岡崎

▼5～8位決定戦
刈谷 25－16 西尾東
岡崎 17－8 安城東
安城東 17－15 西尾東
刈谷 18－13 岡崎

▼決勝リーグ
岡崎城西 26－13 岡崎東
岡崎城西 23－13 岡崎北
岡崎城西 31－7 刈谷北
岡崎北 19－17 岡崎東
岡崎北 22－12 刈谷北
刈谷北 17－16 岡崎東

〔順位〕①岡崎城西②岡崎北③刈谷北④岡崎東、以上4校が県大会へ。

〈女子〉

▼1回戦
西尾東 11－10 岡崎南
幸田 22－7 高浜
豊田 9－5 一色
岩津 6－4 刈谷北
吉良 17－9 愛教大附
安城東 15－4 碧南
刈谷 18－17 安城
岡崎西 10－9 安城南

▼2回戦
豊田南 23－4 西尾東
衣台 17－14 幸田
岡崎東 13－7 豊田
岡崎 16－4 岩津
安城学園 22－5 吉良
西尾 15－10 安城東
岡崎北 18－9 刈谷
三好 25－1 岡崎西

▼3回戦
豊田南 15－5 衣台
岡崎 9－6 岡崎東
安城学園 18－16 西尾
三好 16－4 岡崎北

▼5～8位決定戦
岡崎東 23－15 衣台
西尾 13－11 岡崎北
衣台 16－15 岡崎北
西尾 9－7 岡崎東

▼決勝リーグ
三好 9－8 豊田南
三好 14－6 岡崎
三好 16－13 安城学園
豊田南 13－7 岡崎
安城学園 13－12 豊田南
岡崎 15－7 安城学園

〔順位〕①三好②豊田南③安城学園④岡崎、以上4校が県大会へ。

◎知多支部予選（11月23、24日／武豊高他）

〈男子〉

▼1回戦
東浦 38－11 半田農
半田工 18－17 武豊
半田 52－9 阿久比
知多 18－11 知多東
横須賀 19－12 大府東
大府 18－17 常滑北

▼2回戦
半田東 29－9 東浦
半田 34－17 半田工
横須賀 12－11 知多
東海南 20－17 大府

▼準決勝
半田東 20－11 半田
東海南 20－15 横須賀

▼3位決定戦
半田 37－19 横須賀

▼決勝
半田東 21－11 東海南

※半田東、東海南、半田が県大会へ。

〈女子〉

▼1回戦
阿久比 10－4 東海南
内海 25－4 知多
半田商 17－9 桃陵
東海商 11－10 常滑北
大府東 14－9 大府

▼2回戦
半田 32－4 阿久比
半田東 23－5 内海
半田商 12－10 東海商
武豊 25－5 大府東

▼準決勝
半田東 10－7 半田
武豊 16－7 半田商

▼3位決定戦
半田 20－2 半田商

▼決勝
武豊 15－9 半田東

※武豊、半田東、半田は県大会へ。

◎名古屋南支部予選（11月10、17、23日／桜台高他）

〈男子〉

▼1回戦
日進西 25－6 名古屋大谷
惟信 24－9 富田
瑞陵 28－9 日進
豊明 15－8 名商大付
鳴海 19－10 東郷
向陽 19－8 松蔭
南陽 17－16 昭和
熱田 22－10 享栄
天白 27－14 名城大付

▼2回戦
中京 23－12 日進西
中村 26－18 惟信
瑞陵 22－12 豊明
緑 23－12 鳴海
桜台 27－16 向陽
名市工 17－14 南陽
名古屋南 14－9 熱田
名南工 27－13 天白

▼3回戦
中村 21—21 中京
2PTC1
瑞陵 26—19 緑
桜台 25—15 名市工
名南工 20—9 名古屋南

▼準決勝
瑞陵 27—17 中村
名南工 19—15 桜台

▼3位決定戦
桜台 23—19 中村

▼決勝
名南工 16—14 瑞陵

※名南工、瑞陵、桜台、中村が県大会へ。

〈女子〉

▼1回戦
松蔭 不戦勝 中川商
中村 16—7 名古屋南
鳴海 14—12 名女大
高蔵 10—9 緑
南陽 24—9 瑞陵
熱田 13—12 東海女
若宮商 19—10 東郷

▼2回戦
名短付 56—0 松蔭
昭和 13—11 中村
天白 18—5 鳴海
日進西 15—6 高蔵
向陽 27—10 南陽
熱田 25—4 星城
惟信 25—8 豊明
桜台 17—4 若宮商

▼3回戦
名短付 34—4 昭和
日進西 16—11 天白
向陽 22—9 熱田
桜台 26—8 惟信

▼準決勝
名短付 52—1 日進西
桜台 19—9 向陽

▼3位決定戦
向陽 16—10 日進西

▼決勝
名短付 20—9 桜台

※名短付、桜台、向陽、日進西が県大会へ。

◎名古屋北支部予選
（11月10、17、23日／緑丘商高）

〈男子〉
栄徳 18—4 名学院
名古屋西 9—8 春日井工
菊里 20—12 長久手
市工芸 11—10 千種
春日井 16—9 東山工
旭野 11—7 瀬戸西
北 16—8 明和
山田 19—3 春日井西
東海 8—8 高蔵寺
3PTC2
愛知工 13—8 名東
東邦 14—7 瀬戸北
瀬戸 15—9 春日丘

▼2回戦
愛知 28—10 栄徳
菊里 21—7 名古屋西
春日井 17—10 市工芸
守山 22—12 旭野
北 18—12 春日井東
東海 16—14 山田
愛知工 21—11 東邦
旭丘 30—7 瀬戸

▼3回戦
愛知 24—4 菊里
守山 17—14 春日井
東海 20—12 北
旭丘 25—7 愛知工

▼準決勝
愛知 27—10 守山
旭丘 27—9 東海

▼3位決定戦
守山 17—14 東海

▼決勝
愛知 22—12 旭丘

※愛知、旭丘、守山、東海が県大会へ。

〈女子〉

▼1回戦
旭野 16—4 春日井商
春日井東 25—1 名東
春日井 22—1 瀬戸北
名古屋商 15—6 高蔵寺
千種 11—5 名古屋西
長久手 11—6 春日井西
瀬戸 21—5 椙山
西陵商 16—4 北

▼2回戦
中京女 26—6 旭野
瀬戸西 16—6 春日井東
菊里 13—10 春日井
愛知商 15—6 名古屋商
緑丘商 22—2 千種
淑徳 20—5 長久手
瀬戸 12—4 山田
市邨 23—9 西陵商

▼3回戦
中京女 35—8 瀬戸西
菊里 12—10 愛知商
緑丘商 13—11 淑徳
市邨 26—14 瀬戸

▼準決勝
中京女 26—3 菊里
市邨 20—15 緑丘商

▼3位決定戦
緑丘商 13—11 菊里

▼決勝
中京女 22—12 市邨

※中京女、市邨、緑丘商、菊里が県大会へ。

◎尾張支部予選
（11月3、4、10日／一宮高他）

〈男子〉

▼1回戦
稲沢 10—8 美和
尾北 25—6 木曽川
江南 17—10 佐織工
小牧南 16—11 丹羽
一宮興道 9—6 一宮工
西春 不戦勝 稲沢東
起工 17—7 平和
五条 21—8 尾関学園
蟹江 21—13 犬山
小牧工 15—9 尾西
一宮南 12—6 津島東
津島 23—6 岩倉

▼2回戦
一宮 27—4 稲沢
江南 15—7 尾北
小牧南 22—5 一宮興道
一宮西 23—6 西春
一宮北 21—16 起工
蟹江 21—16 五条
小牧工 23—5 一宮南
犬山南 9—6 津島

▼3回戦
一宮 13—9 江南
一宮西 15—10 小牧南
蟹江 16—12 一宮北
犬山南 10—9 小牧工

▼準決勝
一宮西 15—14 一宮
犬山南 19—5 蟹江

▼3位決定戦
一宮 23—14 蟹江

▼決勝
一宮西 16—10 犬山南

※一宮西、犬山南、一宮、蟹江が県大会へ。

〈女子〉

▼1回戦
尾西 25—3 美和
津島女 13—11 五条
西春 13—8 津島
小牧南 6—3 一宮南

▼2回戦
- 尾西 14－10 佐屋
- 西春 22－1 津島女
- 平和 20－4 小牧南
- 犬山南 10－9 尾北
- 一宮女 8－3 一宮商
- 江南 9－6 一宮
- 一宮興道 12－3 岩倉
- 蟹江 20－7 稲沢東

▼3回戦
- 尾西 11－10 西春
- 犬山南 16－7 平和
- 一宮女 9－2 江南
- 一宮興道 12－11 蟹江

▼準決勝
- 犬山南 16－14 尾西
- 一宮興道 10－9 一宮女

▼3位決定戦
- 尾西 10－6 一宮女

▼決勝
- 一宮興道 20－18 犬山南

※一宮興道、犬山南、尾西、一宮女が県大会へ。

◎県大会（1月15、19、26日、2月2日／名古屋市露橋スポーツセンター他）

〈男子〉

▼1回戦
- 半田 19－17 豊橋西
- 守山 21－18 岡崎北
- 東海 25－13 時習館
- 犬山南 32－10 東海南
- 一宮 25－10 岡崎東
- 旭丘 26－15 刈谷北

▼2回戦
- 名南工 34－15 半田
- 一宮西 16－14 守山
- 桜台 25－11 蟹江
- 岡崎城西 31－10 東海
- 愛知 28－12 犬山南
- 中村 28－12 国府
- 一宮 26－18 瑞陵
- 旭丘 23－12 半田東

▼3回戦
- 名南工 23－9 一宮西
- 岡崎城西 21－12 桜台
- 愛知 23－12 中村
- 旭丘 20－16 一宮

▼決勝リーグ
- 岡崎城西 20－14 名南工
- 愛知 26－13 旭丘
- 愛知 27－12 名南工
- 岡崎城西 21－16 旭丘
- 名南工 20－14 旭丘
- 岡崎城西 17－16 愛知

［順位］①岡崎城西②愛知③名南工④旭丘

※岡崎城西は3年ぶり2回目の優勝。

〈女子〉

▼1回戦
- 菊里 16－5 蒲郡
- 半田東 15－7 豊南
- 緑丘商 31－7 犬山南
- 岡崎 14－2 新城東
- 向陽 17－12 尾西
- 安城学園 16－4 一宮女

▼2回戦
- 名短付 28－3 菊里
- 一宮興道 15－13 半田東
- 日進西 20－17 武豊
- 三好 19－16 緑丘商
- 市邨 15－6 岡崎
- 桜台 10－9 半田
- 向陽 18－15 豊橋西
- 中京女 27－8 安城学園

▼3回戦
- 名短付 36－5 一宮興道
- 三好 25－4 日進西
- 桜台 21－16 市邨
- 中京女 24－8 向陽

▼決勝リーグ
- 名短付 27－4 三好
- 中京女 18－10 桜台
- 名短付 15－12 桜台
- 中京女 23－11 三好
- 名短付 22－13 中京女
- 桜台 15－14 三好

［順位］①名短付②中京女③桜台④三好

※名短付は3年連続6回目の優勝。

茨城県高校新人大会

（11月19、20、12月12～14日／岩井高他）

〈男子〉

▼1回戦
- 土浦一 26－11 神栖
- 竹園 33－26 水戸工

▼2回戦
- 笠間 18－12 土浦一
- 土浦湖北 22－12 波崎一
- 江戸川学園 28－6 玉造工
- 麻生 19－17 水海道一
- 石岡一 29－16 岩井西
- 藤代紫水 24－20 守谷
- 竜ヶ崎南 13－11 水戸一
- 太田一 16－12 藤代
- 岩井 26－5 日立一
- 土浦工 12－0 北総
- 土浦三 18－13 古河三
- 鹿島灘 28－14 下館一
- 牛久 13－12 鉾田一
- 勝田工 16－9 勝田
- 八郷 25－15 土浦日大
- 竜ヶ崎一 22－21 竹園

▼3回戦
- 土浦湖北 21－20 笠間
- 麻生 21－14 江戸川学園
- 藤代紫水 24－19 石岡一
- 太田一 22－11 竜ヶ崎南
- 岩井 27－13 土浦工
- 土浦三 23－12 鹿島灘
- 勝田工 19－15 牛久
- 竜ヶ崎一 20－16 八郷

▼4回戦
- 麻生 27－8 土浦湖北
- 太田一 35－26 藤代紫水
- 岩井 23－14 土浦三
- 竜ヶ崎一 27－11 勝田工

▼準決勝
- 麻生 26－12 太田一
- 岩井 23－12 竜ヶ崎一

▼3位決定戦
- 竜ヶ崎一 23－14 太田一

▼決勝
- 岩井 16（9－5、5－9、2－0、0－1）15 麻生

※岩井は2年ぶり4回目の優勝。

〈女子〉

▼1回戦
- 石岡二 11－8 牛久
- 結城二 28－5 土浦湖北
- 八郷 22－3 水戸二
- 麻生 10－6 那珂湊二
- 藤代紫水 22－7 岩井
- 鉾田二 20－4 下妻二
- 竜ヶ崎一 21－11 太田二
- 水海道一 30－5 下館二
- 日立二 17－13 竹園
- 藤代 17－7 友部
- 土浦二 15－11 高萩

▼2回戦
- 石岡二 37－4 笠間
- 結城二 26－5 八郷
- 麻生 21－2 北総

潮来 19—18 藤代紫水
水海道二 26—5 鉾田二
水海道一 11—9 竜ケ崎一
日立二 17—4 藤代
竜ケ崎二 18—3 土浦二
▼3回戦
結城二 21—9 石岡二
麻生 10—9 潮来
水海道二 23—9 水海道一
竜ケ崎二 17—10 日立一
▼準決勝
結城二 16—7 麻生
水海道二 22—6 竜ケ崎二
▼3位決定戦
竜ケ崎二 17—11 麻生
▼決勝
水海道二 18 (8—7, 10—5) 12 結城二
※水海道二は6年連続25回目の優勝。

香川県中学校新人大会

(1月6、7日/光洋中、県体育館)

〈男子〉
▼1回戦
香川一 15—10 城内
香東 14—5 桜町
▼2回戦
香川一 15—11 古高松
玉藻 21—8 勝賀
山田 18—9 光洋
香東 15—5 紫雲
▼準決勝
香川一 19—11 玉藻
香東 13—7 山田
▼決勝
香東 20 (8—7, 8—9, 3—1, 1—1) 18 香川一

〈女子〉
▼1回戦
塩江 11—2 古高松
山田 8—3 桜町
▼2回戦
塩江 11—5 玉藻
香東 19—5 光洋
香川一 11—1 太田
山田 13—3 紫雲
▼準決勝
塩江 11—7 香東
山田 16—15 香川一
▼決勝
山田 10 (6—5, 4—4) 9 塩江

第20回佐賀県室内総合選手権

(12月15、22、25日/佐賀県体育館)

〈一般1部〉
▼1回戦
龍登園 15—10 佐賀農高3年
鵲友ク 14—13 アパーシーク
オールド教員 27—12 キャビンマイルド
佐賀教員 24—12 白石ク
▼準決勝
龍登園 19—18 鵲友ク
佐賀教員 19—15 オールド教員
▼決勝
佐賀教員 19 (9—7, 10—6) 13 龍登園

〈一般2部〉
▼1回戦
ダンディーズ 11—6 神埼エラーズ
Kク 20—9 レディービート
▼準決勝
スポーツ主事会 19—10 ダンディーズ
Kク 15—11 よろずや工務店
▼決勝
Kク 12 (7—5, 5—7) 12 スポーツ主事会

〈一般3部〉
▼1回戦
サンダーバード 8—6 神埼バドラーズ
基山中教員 12—7 三瀬小中教員
▼決勝
サンダーバード 10 (5—2, 5—4) 6 基山中教員
2PTC1

〈一般女子〉
▼1回戦
武雄・嬉野ク 10—7 ホットク
ポップク 11—5 神農OG
神埼農3年 10—3 佐賀東3年
▼準決勝
ミス&ミセス 12—7 武雄・嬉野ク
ポップク 8—6 神埼農3年
▼決勝
神埼農3年 15 (7—1, 8—3) 4 ミス&ミセス

〈中学男子〉
▼1回戦
脊振中 12—0 広川ク
基山中C 13—4 タイガース
ライオンズ 7—5 三瀬中A
東脊振中 12—4 多久中央中B
▼2回戦
基山中A 15—3 脊振中
神埼中B 13—3 千代田中
神埼中D 8—3 三瀬中B
多久中央中A 12—11 基山中C
城北中 9—7 ライオンズ
基山中B 12—10 神埼中C
ジャイアンツ 10—1 神埼中E
神埼中A 15—3 東脊振中
▼3回戦
神埼中B 14—13 基山中A
多久中央中A 9—6 神埼中D
基山中B 13—9 城北中
神埼中A 17—2 ジャイアンツ
▼準決勝
神埼中B 11—4 多久中央中A
神埼中A 14—6 基山中B
▼決勝
神埼中A 8 (5—3, 3—5) 8 神埼中B
3PTC1

〈中学女子〉
▼1回戦
三田川中 5—4 神埼中C
脊振中 6—1 三根中
▼2回戦
多久中央中A 10—7 三田川中
千代田中A 7—6 神埼中B
多久中央中B 14—1 千代田中B
神埼中A 8—3 脊振中
▼準決勝
多久中央中A 6—2 千代田中A
神埼中A 9—1 多久中央中B
▼決勝
神埼中A 9 (4—2, 5—2) 4 多久中央中A

〈小学校男子〉
▼1回戦
ブリジストン 12—2 三根西小C
スポーツ少年団
三根東小A 7—2 三根西小B
三根西小A 11—3 三根東小C
三根東小B 3—2 厳木小広田分
▼準決勝
ブリジストン 10—3 三根東小A
スポーツ少年団
三根西小A 12—1 三根東小B
▼決勝
ブリジストン
スポーツ少年団 3 (1—1, 2—1) 2 三根西小A

全国高校選抜青森県2次予選会

(1月8、9日/弘前市民体育館)

〈男子〉
▼リーグ戦
野辺地 30—9 青森南

青森商 26-15 青森
野辺地 16-15 青森商
青森南 18-16 青森
青森商 30-21 青森南
野辺地 40-11 青森
[順位]①野辺地②青森商③青森南④青森

〈女子〉
▼リーグ戦
野辺地 13-6 青森商
青森西 20-15 野辺地
青森商 19-18 青森西
[順位]①青森西②野辺地③青森商
※得失点差による

才17回岡山県高校室内選手権

（1月11、12日／岡山県体育館）

〈男子〉
▼1回戦
総社 21-15 玉野
操山 30-11 津山工
東岡山工 17-3 津山
児島 15-9 倉敷商
古城池 15-14 朝日
関西 22-6 井原
天城 23-9 落合
倉敷工 20-17 玉野光南
▼2回戦
総社 18-17 操山
東岡山工 16-11 児島
古城池 20-6 関西
倉敷工 13-6 天城
▼準決勝
総社 20-13 東岡山工
玉野光南 13-11 古城池
▼3位決定戦
東岡山工 12-10 古城池
▼決勝
総社 14（6-6, 8-5）11 玉野光南
※総社は2年ぶり3回目の優勝

〈女子〉
▼1回戦
総社 7-3 備前東
▼2回戦
西大寺 17-2 総社
倉敷南 20-12 古城池
児島 15-9 天城
落合 11-9 真備
▼準決勝
西大寺 14-8 倉敷南
児島 10-9 落合
▼3位決定戦
落合 9-8 倉敷南
▼決勝
児島 16（8-3, 8-7）10 西大寺
※児島は初優勝。

才33回大阪総合選手権

（11月11、12、13、17日／大阪中央体育館、東淀川体育館）

〈男子〉
▼1回戦
大阪ガス 28-14 雪陵ク
枚方ク 28-18 上宮レインボー
なにわク 12-0 ウォーターフラワー
大阪イーグルス 20-20（2PTC1）日鉄建材工業
美津濃 26-20 羽曳野ク
大阪教員ク 32-15 和大ク
ボンチフエローズ 22-21 アーガス
▼2回戦
大阪ガス 28-10 白鷺ク
なにわク 12-0 枚方ク
大阪イーグルス 40-17 美津濃
大阪教員ク 27-16 ボンチフエローズ
▼準決勝
大阪ガス 36-18 なにわク
大阪イーグルス 27-19 大阪教員ク
▼決勝
大阪イーグルス 23（10-14, 13-8）22 大阪ガス

〈女子〉
▼リーグ戦
大和銀行B 30-8 城南ク
大和銀行A 26-24 大和銀行B
大和銀行A 22-6 城南ク
[順位]①大和銀行A②大和銀行B③城南ク

三重県高校新人大会

（1月11、12、15日／四日市市緑地体育館、富田ジャスコ体育館）

〈男子〉
▼1回戦
海星 25-6 高田
四日市 29-10 朝明
津工 16-14 桑名西
四日市四郷 27-8 日生才一
▼2回戦
四日市工 39-13 海星
亀山 14-6 桑名北
四日市 23-9 津
津東 26-10 津工
四日市南 25-13 四日市西
津西 28-7 四日市中央工
桑名 26-8 四日市四郷
▼3回戦
四日市工 40-12 尾鷲
四日市 26-14 亀山
四日市南 19-17 津東
桑名 22-9 津西
▼準決勝
四日市工 33-7 四日市
四日市南 16-13 桑名
▼3位決定戦
四日市 22-14 桑名
▼決勝
四日市工 38（19-3, 19-3）6 四日市南

〈女子〉
▼1回戦
亀山 13-4 尾鷲
四日市四郷 15-4 朝明
洒商 キケン 桑名北
桑名 キケン 津西
津東 44-1 津
四日市南 16-11 上野
四日市西 10-6 四日市
▼2回戦
暁 36-2 亀山
洒商 34-7 四日市四郷
四日市西 29-4 桑名
四日市南 27-9 津東
▼決勝
暁 12-7 洒商
四日市南 13-11 四日市西
▼3位決定戦
洒商 16-2 四日市西
▼決勝
暁 26（14-5, 12-4）9 四日市南

東海室内選手権三重県予選

（1月12、26日／四日市市体育館、本田技研鈴鹿体育館）

〈一般男子〉
▼1回戦
鈴鹿工専 18-17 皇学館大
▼2回戦
本田技研爽風会 38-13 鵜ノ森ク
三重教員 30-20 四日市中央ク
尾鷲ク 28-17 鳥羽商船
本田技研鈴鹿 53-9 鈴鹿工専
▼準決勝
本田技研爽風会 37-14 三重教員
本田技研鈴鹿 55-7 尾鷲ク
▼決勝
本田技研鈴鹿 21（12-4, 9-5）9 本田技研爽風会

昭和60年度
ハンドボールコーチ中央研修会

日時　昭和61年2月22日（土），23日（日）
場所　国立オリンピック記念青少年総合センター

〈内容〉

1．理想とするハンドボールについて
　(1)　どういうゲームを目指せばよいのか
　(2)　今、活性化のための具体策は何か
2．ルールと審判法
　(1)　1985年ルール改正の意図
　(2)　段階的適用について
　　①その主旨と方法
　　②一つの罰則のおよび範囲について
　　③相手に対する動作について
　　　段階的適用になる行為
　　④反スポーツマン行為
　　　段階的適用になる反スポーツマン行為
　　⑤失格になる行為
3．チャージングの判定
4．ペナルティの判定
5．オーバーステップの判定
6．キックの判定
7．不正交替と追加（extra）プレーヤーについて
8．アドバンテージについて

〈総活〉

今回の研修会は、審判部の方と指導者の方が一緒に集い、活発な議論が展開された。今回は、VTR の使用という視覚に訴える方法で行なわれ、口頭だけでは伝わりにくい部分も VTR の使用によってお互いに理解された部分が多く見受けられた。60年度の全日本総合のレフェリングに疑問に持っていた指導者も、ルールを勉強することによって、審判部のほうとあゆみよりをみせたのではないかと思われる。現在、ハンドボールは大きく変ろうとしている転換期であり、いつまでも従来のものにとらわれることなく、また、世界の流れに遅れることなく常にハンドボール競技の発展のために、ハンドボール本来持っている特性を生かした指導がなされるべきであり、レフェリングがなされるべきである。これは、どちらかが先走ってしまってもいけないことであるし、お互いに手をとり合い、お互いの立場を尊重しあっていくべきである。そういう意味でも、今回の研修会は意味のあるものであり、今後このような機会が増えることを望む。

〈参加者名簿〉

清水宣雄（千葉）　住森憲治（栃木）　武内貞雄（群馬）　近藤　實（千葉）　千野恒夫（山梨）　塩谷和雄（神奈川）　斉藤和夫（茨城）　濱野信一（栃木）　北井晴次（埼玉）　栗岩淳一（東京）　佐野和夫（東京）　岩崎孝志（京都）　設楽孝治（神奈川）　奥原強之（鹿児島）　菅野富夫（埼玉）　大出治男（栃木）　滝口孝之（栃木）　岸　裕行（栃木）　石甲斐英三（大分）　河村レイコ（茨城）　宮崎光市（北海道）　緒方嗣雄（大阪）　斉藤　実（山梨）　矢澤達司（茨城）　谷藤勝美（岩手）　佐伯紘一（福岡）　池田　修（福岡）　大西武三（茨城）　飯田信行（東京）　笹倉清則（東京）　本田娟一（埼玉）　華立要（福井）　宮本章次（沖縄）　塚崎則男（福井）　池田和男（神奈川）　坂口健二（東京）　後藤　登（東京）　儀間次男（沖縄）

昭和61年度の登録手続きを忘れずに行なって下さい。
「日本ハンドボール50年史」の申し込みをよろしくお願いします。

〈男子ナショナル監督〉野田氏が復帰

昨年6月の大同特殊鋼チームの不祥事で男子ナショナルチームの監督を辞任していた野田清氏が、4月1日の大同特殊鋼の対外活動の解禁と同時に、元の監督に復帰することになった。

昨年7月の米国遠征のあと、強化委員会で新監督の人選を検討して来たが、指導性、職場環境など野田氏に匹敵する適任者が見当たらなかった。

しかし、事件を起こした本人の処分も決まらない状態で野田氏やその所属する会社に野田氏の復帰を云々できる状態ではなかったので強化部長を代理監督に立てて野田体制下のコーチングスタッフを温存し時機の到来を待っていた。

12月の評議員会では先の見通しも立たないような状態はよくないので早急に後任の監督を決めるようにという意見も出た。

そこで、12月から1月にかけて、野田氏および大同特殊鋼に対し野田監督復帰について打診したところ、双方の内諾が得られたので、1月の常務理事会で、4月からの野田監督復帰とそれまでの間は強化部長の代理ではなく津川ヘッドコーチ（湧永製薬）を監督代行にして2月のヨーロッパ遠征や強化合宿をこなすことに決め2月開催の理事会の承諾も得た。ただ、大同特殊鋼チームが謹慎中であることを考慮して3月に入って公表したものである。

野田体制の課題

野田監督の復帰によって昨年6月の指導体制に戻るわけであるが、もともと野田体制の目指したところは88年のソウル・オリンピックへの出場と入賞にあり、選手もそれに合わせて全面的な若返りを図った。新全日本チームのエース的存在であった田口が抜けてチームの再構築が迫られようが、基本路線は変るまい。

選手のそれぞれの個性を生かしたうえで、そのパワーアップと精神力の強化が課題となる。

一般に今のスポーツ選手は、体力が低下していると言われている。身長は確かに延びているが、全般的に細身になっている。ヨーロッパの選手に伍して戦うためには、力とスタミナの涵養が絶対不可欠である。技術の面ではヨーロッパに決してひけをとらない。合宿毎に体力測定を基準に達しない者はどんどん落としていくという方針は堅持して貰いたい。

次に精神力の強化であるが、これまた日本のスポーツの一般的傾向として選手の精神力の弱さが指摘される。飽食の時代にハングリーになれというのは難しいことである。どのようにして目的意識を与えるのか。理屈ではなくて、この親分のために、という情緒的動機も、わが国では大きい。ロサンゼルス・オリンピックのアジア予選で対韓国1回戦に敗れた夜の選手だけのミーティングで控えの選手から涙の叱咤を受けた選手たちが、当時の市原監督を男にしようと心を一にして、その後韓国、中国を見違えるような戦いぶりで連破してオリンピック出場権を獲得したのは記憶に新しい。野田監督には、厳しさばかりではなくそのような指導者としての風格がある。

今年の9月には、ソウル・オリンピックのプレ・オリンピックともいうべきアジア大会がある。そして来年はオリンピック出場権をかけたアジア予選である。

大同特殊鋼チームの復帰によってナショナルチームの立直しが当面の緊急課題である。そしてソウルへ向けて、野田監督とそれを支援する津川昭、佐藤要二両コーチに寄せられる期待も大きい。

スポーツが好き。汗が好き。

笑顔があります。涙があります。
躍動があります。記録への挑戦があります。
チームプレイの和があります。
からだを動かしていると
人生の大切なものがたくさん見えてきます。
新日鉄は、スポーツを通し
心身を鍛える皆様に声援をおくります。

新日本製鐵

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第二五〇号
昭和四十年六月七日第三種郵便物認可　昭和六十一年三月二十五日印刷　昭和六十一年四月一日発行
東京都渋谷区　一ー一ー一
電話代表(48　)　三六一
振替　東京　六ー五八三四八番
編集兼発行人　大野金一
定価三百五拾円
(年間購読料三千三百円)